

闘争の聲、甚だ怖畏す可し。鳩槃、茶鬼、土埴に蹲踞せり。
 或時は地を離るゝこと、一尺二尺、往返遊行し、縦逸に嬉戲す。
 狗の兩足を捉つて、撲つて聲を失はしめ、脚を以て頸に加へて、狗を怖きして自ら
 樂しむ。

復諸々の鬼有り、其の身長大に、裸形黒瘦にして、常に其の中に住せり。
 大惡聲を發して、叫び呼んで食を求む。復諸々の鬼有り、其の咽針の如し。
 復諸々の鬼有り、首牛頭の如し。或は人の肉を食し、或は復狗を噉ふ。
 頭髮蓬亂して、殘害兇險なり。饑渴に逼められて、叫喚馳走す。
 夜叉餓鬼、諸々の惡鳥獸、饑急にして四に向かひ、窗牖を窺ひ看る。
 是の如き諸難、恐畏無量なり。是の朽ち故りたる宅は、一人に屬せり。

其の人近く出て、未だ久しからざるの間に、後に宅舎に、忽然火起り、
 四面一時に、其の焰俱に熾なり。棟梁椽柱、爆めく聲震ひ裂け、
 摧け折れ墮ち落ちて、墻壁崩れ倒る。諸々の鬼神等、聲を揚げて大に叫び、
 鷓鴣諸鳥、鳩槃茶等、周憚惶怖して、自ら出づること能はず。
 惡獸毒蟲、孔穴に藏れ竄れ、毘舍闍鬼、亦其の中に住せり。
 福德薄きが故に、火に逼められ、共に相ひ殘害して、血を飲み肉を噉ふ。
 野干の屬、並に已に前に死す。諸々の大惡獸、競ひ來つて食噉す。
 臭煙蓬煇して、四面に充塞す。蜈蚣蚰蜒、毒蛇の類、
 火に焼かれて、争ひ走つて穴を出づ。鳩槃茶鬼、隨ひ取つて而も食ふ。
 又諸々の餓鬼、頭上に火燃へ、飢渴熱惱して周憚悶走す。

其の宅是の如く、甚だ怖畏す可し。毒害火災、衆難一に非ず。

是の時に宅主、門外に在つて立つて、有る人の言を聞く、

「汝が諸子等、先きに遊戯せるに因つて、此の宅に來入し、

稚小無知にして、歡樂著せり」と。長者聞き已つて、驚いて火宅に入る。

方さに宜く救濟して、燒害無から合むべし。諸子に告諭して、衆の患難を説く、

「惡鬼毒蟲、炎火蔓延せり、衆苦次第に、相續して絶へず。

毒蛇虻蚊、及び諸々の夜叉、鳩槃荼鬼、野干狐狗、鵙鷲瑠璃、百足の屬、飢渴の惱

み急にして、甚だ怖畏す可し。

此の苦すら處し難し、況や復大火をや」と。

諸子無知にして、父の誨を聞くに雖も、猶故樂著して、嬉戲すること已まらず。

是の時に長者、而も是の念を作さく、「諸子此の如く、我が愁惱を益す。

今此の舍宅は、一として樂む可き無し。而るに諸子等、嬉戲に耽溺して、

我が教を受けず、將に火に害せられんとす。即便ち思惟して、諸の方便を設けて

諸子等に告ぐ「我に種々の珍玩の具の、妙寶の好車有り。

羊車鹿車、大牛の車なり。今門外に在り、汝等出で來れ。

吾汝等が爲に、此の車を造作せり。意の所樂に隨つて、以て遊戯す可し。」

諸子、此の如き諸々の車を説くを聞いて、即時に奔競して、馳走して出で、空地に

到つて、諸々の苦難を離る。

長者子の、火宅を出づることを得て、四衢に住するを見て、師子の座に坐せり。

而も自ら慶んで言はく、「我今快樂なり。此の諸子等、生育すること甚だ難し。

愚小無知にして、而も險宅に入れり。諸々の毒蟲多く、魘魅畏る可し。大火猛焰、四面に俱に起れり。而るに此の諸子、嬉戯に貪著せり。

我已に之れを救ひて、難を脱ることを得せしめたり。是の故に諸人、我今快樂なりと。

爾の時に諸子、父の安坐せるを知つて、皆父の所に詣つて、而も父に白して言さく、

「願はくは我等に、三種の寶車を賜へ。前きに許したまふ所の如き、諸子出で來れ常に三車を以て、汝が所慾に隨ふべしと。今正さに是れ時なり、惟だ給與を垂れたまへ」

長者大に富んで、庫藏衆多なり。金銀瑠璃、砗磲瑪瑙、

衆の寶物を以て、諸の大車を造れり。莊校嚴飾して、周匝して欄楯あり。

四面に鈴を懸け、金繩絞絡せり。眞珠の羅網、其の上に張り施し、

金華の諸櫻、處處に垂れ下せり、衆彩雜飾し、周匝圍繞せり。

柔輓の繒纈、以て茵褥を爲し。上妙の細氈、價直千億にして、

鮮白淨潔なる、以て其の上に覆へり。大白牛有り、肥壯多力にして、

形體殊好なり。これを以て寶車を駕せり。諸々の價從多くして、而も之れを侍衛せり。

是の妙車を以て、等しく諸子に賜ふ。諸子是の時、歡喜踊躍して、是の寶車に乗つて、四方に遊び嬉戯快樂して、自在無礙ならんが如し。

舍利弗に告ぐ、我も亦是の如し、衆聖の中の尊、世間の父なり。

一切衆生は、皆是れ我が子なり。深く世樂に著して、慧心有ることを無し。

三界は安きこと無し、猶ほ火宅の如し。衆苦充滿して、甚だ怖畏す可し。常に生老、病死の憂患有り。是の如き等の火、熾然として息まず。如來は已に、三界の火宅を離れて、寂然として閑居し、林野に安處せり。今ま此の三界は、皆な是れ我が有なり。其の中の衆生は、悉く是れ吾が子なり。而も今ま此の處は、諸々の患難多し。唯我一人のみ、能く救護を爲す。復た教誥すと雖も、而も信受せず、諸々の欲染に於て、貪著、いきが故に。是を以て方便して、爲に三乘を説いて諸々の衆生をして、三界の苦を知らしめ、出世間の道を、開示し演説す。是の諸子等、若し心決定しぬれば、三明、及び六神通を具足し、緣覺、不退の菩薩を得ること有り。汝舍利弗、我衆生の爲に、此の譬喩を以て、一佛乘を説く。

汝等若し能く、是の語を信受せば、一切皆當に、佛道を成ずることを得べし。是の乘は微妙にして、清淨第一なり。諸の世間に於て、爲めに上有ること無し。佛の悦可したまふ所、一切衆生の、應さに稱讚し、供養し禮拜すべき所なり。無量億千の、諸力解脱、禪定智慧、及び佛の餘の法あり。是の如きの乘を得せしめて、諸子等をして、日夜劫數に、常に遊戲することを得。諸々の菩薩、及び聲聞衆と、此の實乘に乗じて、直ちに道場に至らしむ。是の因縁を以て、十方に諦に求むるに、更に餘乘無し、佛の方便を除く。舍利弗に告ぐ、汝諸人等は、皆な是れ吾が子なり、我は則ち是れ父なり。汝等累劫に、衆苦に燒かる。我皆な濟拔して、三界を出でしむ。我先に、汝等滅度すと説くと雖も、但生死を盡くして、而も實には滅せず。今の應

に作すべき所は、唯佛の智慧なり。

若し菩薩有らば、是の衆の中に於て、能く一心に、諸佛の實法を聴け。

諸神世尊は、方便を以てしたまふに雖も、所化の衆生は、皆な是れ菩薩なり。

若し人小智にして、深く愛慾に著せる、是れ等の爲の故に、苦諦を説きたまふ。

衆生心喜んで、未曾有なることを得。聖者の説きたまふ苦諦は、眞實にして異無し

若し衆生有つて、苦の本を知らず。深く苦の因に著して、暫くも捨つること能はず

是れ等の爲の故に、方便して道を説きたまふ。諸苦の所因は、貪欲爲れ本なり。

若し貪欲を滅すれば、依止する所無し。諸苦を滅盡するを、第三の諦と名づく。

滅諦の爲の故に、道を修行す。諸の苦縛を離る、を、解脱を得と名づく。

是の人何に於てか、而も解脱を得る、但虚妄を離る、を、名づけて解脱と爲す。

其れ實には未だ、一切の解脱を得ず。聖者は人は、未だ實に滅度せずと説きたまふ。

斯の人未だ、無上道を得ざるが故に、我が意にも、滅度に至らしめたりと欲はず。

我は爲れ法王、法に於て自在なり、衆生を安穩ならしめんが故に、世に現す。

汝舍利弗、我が此の法印は、世間を利益せん、欲するが爲の故に説く。

所遊の方に在つて、妄りに宣傳すること勿れ。若し聞くこと有らん者、隨喜し頂受

せば、

當に知るべし是の人は、阿惟越致なり(不退轉)。若し此の經法を、信受すること有

らん者は、

是の人は已に會て、過去の佛を見たてまつつて、恭敬供養し、亦是の法を聞けるな

若し人能く、汝が所説を信すること有らんは、則ち爲れ我を見、亦汝、及び比丘僧並びに諸の菩薩を見るなり。

斯の法經は、深智の爲めに説く。淺識は之を聞いて、迷惑して解らず。

一切の聲聞、及び辟支佛は、此の經の中に於て、力及ばざる所なり。

汝舍利弗、尙ほ此の經に於ては、信を以て入ることを得たり、況や餘の聲聞をや。

其餘の聲聞も、聖語を信するが故に、此の經に隨順す、己が智分に非ず。

又舍利弗、憍慢懈怠、我見を計する者には、此の經を説くこと莫かれ。

凡夫の淺識にして、深く五欲に著せるは、聞くことも解ること能はじ、亦爲に説くこと勿れ。

若し人信ぜずして、此の經を毀謗せば、則ち一切、世間の聖種を斷ぜん。

或は復讐して、而も疑惑を懷かん、汝當に、此の人の罪報を説くを聽くべし。

一若しは佛の在世にもあれ、若しは滅度の後にもあれ、其れ斯の如き、經典を誹謗すること有らん。

經を讀誦し、書持すること有らん者を見て、輕賤憎嫉して、而も結恨を懷かん。

此人の罪報を、汝今復聽くべし。其人命終して、阿鼻獄に入らん。

一劫を具足して、劫盡きなば更に生れん。是の如く展轉して、無數劫に至らん。

地獄より出でば、當に畜生に墮つべし。若し狗野干として、其の形ち領瘦し、

鬚髮疥癩にして、人に觸燒せられ、又復人に、惡賤せられん。常に饑渴に困んで、

骨肉枯竭せん。

生きては楚毒を受け、死しては瓦石を被らん。聖種を斷ずるが故に、斯の罪報を受けん。

若しは駝駝と作り、或は驢の中に生まれて、身に常に重きを負ひ、諸の杖捶を加へられん。

但水草を念ふて、餘は知る所無けん。斯の經を誇するが故に、罪を獲ること是の如し。

有ひは野干と作つて、聚落に來入せば、身體疥癩にして、又一目無からん。諸の童子に、打擲せられ、諸の苦痛を受けて、或時は死を致さん。

此に死し已つて、更に鱗身を受けん。其の形長大にして、五百由旬ならん。聾聵無足にして、蛇轉腹行し、諸の小蟲に、喰食せられて、

晝夜苦を受くるに、休息有ること無けん。斯の經を誇するが故に、罪を獲ること是の如し。

若し人と爲ることを得ては、諸根闇鈍にして、性陋癡慧、盲聾背偏ならん。言説する所有らんに、人信受せず。口の氣常に臭く、鬼魅に著せられん。

貧窮下賤にして、人に使はれ、多病瘠瘦にして、依古する所無く。人に親附すと雖も、人意に在かず。若し所得有れば、尋いで復忘失せん。

若し醫道を修して、方に順じて病を治せば、更に他の疾を増し、或は復死を致さん。若し自ら病有らば、人の救療するもの無く、

設ひ良藥を服すとも、而も復増劇せん。若しは他の反逆し、抄劫し竊盗せん。是の如き等の罪、横さまに其の殃に罹らん

斯の如き罪人、永く佛、衆聖の王の、説法教化したまふを見たてまつらず。
 斯の如きの罪人は、常に難處に生まれ。狂聾心亂にして、永く法を聞かず。
 無數劫の、恒河沙の如きに於て、生まれては輒ち聾啞にして、諸根不具ならん。
 常に地獄に處ること、園觀に遊ぶが如く。餘の惡道に在ること、己が舍宅の如く。
 驅驢猪狗、是れ其の行處ならん。斯の經を謗するが故に、罪を獲ること是の如し。
 若し人ど爲ることを得ては、聾盲瘡啞にして、貧窮諸衰、これを以て自ら莊嚴し水
 腫乾疥、疥癩癰疽、是の如き等の病、これを以て衣服となさん。
 身常に臭き處にして、垢穢不淨に。深き我見に著して、瞋恚を増益し。
 姪欲熾盛にして、禽獸を擇ばず。斯の經を謗するが故に、罪を獲ること斯の如し。
 舍利弗に告ぐ、此の經を謗ぜん者、若し其の罪を説かんに、効を窮むとも盡きじ。

是の因縁を以て、我故に汝に語る、一無智の人の中に、此の經を説くこと莫かれ。
 若し利根にして、智慧明了に、多聞強識にして、聖道を求むる者有らん。
 是の如きの人に、乃ち爲に説く可し。若し人曾て、億百千の尊者を見たてまつりて
 諸の善本を植ふ、深心堅固ならん。是の如きの人に、乃ち爲に説く可し。
 若し人精進して、常に慈心を修し、身命を借まざらんに、乃ち爲に説くべし。
 若し人恭敬して、異心有ること無く、諸の凡愚を離れて、獨り山澤に處せん。
 是の如きの人に、乃ち爲に説く可し。又舍利弗、若し人有つて、
 惡智識を捨て、善友に親近するを見ん。是の如きの人に、乃ち爲に説く可し。
 若し聖子の、持戒清潔にして、淨明珠の如くにして、大乘經を求むるを見ん。
 是の如きの人に、乃ち爲に説く可し。若し人瞋り無く、質直柔軟にして、

常に一切を懸れみ、諸聖を恭敬せん、是の如きの人に、乃ち爲に説く可し。
 復聖子の、大衆の中に於て、清淨の心を以て、種種の因縁、
 譬喩言辭をもつて、説法すること無礙なる有らん。是の如きの人に、乃ち爲に説く
 可し。

若し比丘の、一切智の爲に、四方に法を求めて、合掌し頂受し、
 但樂つて、大乘經典を受持して、乃至、餘經の一偈をも受けざる有らん。
 是の如きの人に、乃ち爲に説く可し。人の至心に、聖舍利を求むるが如く、
 是の如く經を求め、得已つて頂受せん、其の人復、餘經を志求せず、
 亦未だ曾て、外道の典籍を念せず。是の如きの人に、乃ち爲に説くべし」
 舍利弗に告ぐ、我是の相にして、聖道を求むる者を説かんに、劫を窮むとも盡くさ

じ。

是の如き等の人は、則ち能く信解せん。

歸命頂禮靈法加持一切苦厄解除退散惟神 靈幸倍坐世々々々々々」

と一生懸命に念じてゐる。テーマスはこの聖經の始終を聞いてハツと自ら胸を抱き其
 の場にガタリと打ち倒れ人事不省に陥つて了つた。治國別を始め一同は直ちに神の大
 前に祈願を凝らした。

(大正一二、三、三、舊一、一六、於龍宮館 鮮月出口伊佐男蔵)

第一二章 靈

婚 (一四二〇)

四邊暗澹として日月星辰の光もなく肌を穿く如き寒風は上下左右より吹雪となつて吹き来る。魑魅魍魎の叫ぶ聲、山の尾の上や川の底より嫌らしく聞え来る。身体兀立し、瘦せ衰へた一人の男、杖を力にトボくと崎驅たる隧道を當途もなしに下り行く。稍ホノリと明るくなつたと見れば野中に立てる大なる家屋の前、何處の果かは知らねども、かゝる淋しき一人旅、何は兎もあれ、立寄つて一夜の宿を乞はんものと門を潜つて入り見れば、柱は虫喰ひ、處々に壁破れ、高き堂舎も柱根砕け朽ち、梁棟傾き歪み、垂木朽、脱げ落ち、得も云はれぬ臭氣四邊に充ち満ちたり。熊鷹鷲蛇、蟬、蚊、蜈蚣、蜘蛛、百虫、蝮を始め名も知れぬ惡虫の輩、屋内を前後左右に往來し尿

尿の臭鼻をつき、蛆虫、糞虫、足許に集まり來る其嫌らしさ。テームスは途方に暮れて此家を立去らんと思ふ折しも山犬の群、幾百ともなく現はれ來りて、左右よりテームスを取圍み、飢疲れたる様にてテームスを噛み喰らはんと吠猛る。テームスは命限りに此家を立出で救ひを呼べど如何はしけん。聲調亂れて吾乍ら其何を云へるやを辨じ難き迄になつて來た。されど恐怖心に驅られて蒼草の生れたる薄暗き野路を、杖を力に轉けつ輾びつ逃げ出せば前方より夜叉、惡鬼、二人の女を追ひ駆ける。女はテームスが前に躓き倒れた。よくよく見れば吾子のスミエル、スガールの二人である。夜叉、惡鬼は忽ち追つき、苦しむ二人の娘を忽ち四肢を引きちぎりテームスが面前にて噛み喰らう、その嫌らしさ。目の前吾子の危難を見る、身も世もあられぬ心の苦み、神を念じ、せめては吾身なりと救はれんと合掌せんと焦れども如何はしけん身体強直

し、自由の利かぬ浅間しさ。こりやこうしては居られぬと八九分迄も喰ひ盡された娘の首を眺め、これ今生の見おさめと轉けつ帳びつ、北へくと走れども、何者か足にまつばる心地して、焦れば焦る程進み得ざるぞ悲しけれ。後の方より幾百萬とも數へ難き程の夜叉、惡鬼の叫び聲、

惡鬼「ヤア／＼それへ逃げ行くチームスの爺、一時も早く引捉へ吾等の食に供せむ」

と叫ばはる聲に驚いて空打仰けは空中に六面八臂の妖怪、妻のベリシナの頭髪を掴み空中にブラ下けてゐる。ベリシナは悲鳴をあけて

ベリシナ「チームス殿、助けておくれ」

と叫ぶ聲、五臟六腑に泌み渡り、煩悶苦惱やるせなく進退こ、に谷まつて、因果を定め佇む折しも、以前の妖怪は數千人の曲鬼を率ゐて、チームスが前に現はれ來り、雷

の如き聲を放つて言葉鋭く、

妖怪「我は兇黨界の大魔王、妖幻坊を役せる羅刹なり。汝が家は祖先代々より民の膏血を絞り、巨萬の財を積み乍ら、饑餓凍餒の民を救ふ事を知らず、貧婪惡徳日に月に重なり罪障滅する時なく、こゝに汝が祖先は冥罰を蒙り、かくの如き夜叉惡鬼となり、尿尿を飲食し、惡獸惡虫を餌食となし、極熱極寒の苦みに日に幾回となく惱められ悲惨の生涯を送りつゝあり。然るに汝、此度彌勒神政の太柱神、大國常立大神の守らせ玉ふ三五教の宣傳使治國別の助けにより最愛の娘が危難を救はれ、一時は命の親と喜び崇め、三五教の信者とならんまで誓ひたりしに、汝の精靈頑愚鈍慳にして心中已に三五教を忌避し居るに非ずや。又バラモン教の宣傳將軍鬼春別以下下の神に救はれ救されたる真人に對し、その言葉に、行ひに無限の侮蔑を表はし人

々の精霊を惱ます罪、萬死も尙及ぶべからず。汝今の間に心を改めざれば、これより極寒地獄に突墮し、無限の永苦を興ふべし。早く來れ」
と手を執つて北へへ無理無体に引摺り行く。

チームスが祖先と聞けたる夜叉、悪鬼の數々は後より嫌らしき聲を一齊に放ちて追かけ來る淺間しさ。骨肉相食む地獄道の此慘狀にチームスは人心地もせず、魔王がなす儘に泣き叫び乍ら、際限もなき枯野ヶ原の石道を眞裸足のまゝ、足を破り血を路上に染つゝ無我無中になつて曳かれ行く。

何時とはなしにチームスは薄暗い險峻な山の麓に着いてゐた。以前の悪鬼羅刹の影は煙の如く消へ、四方の山の上へ悲しげな叫び聲が、間歇的に風のまにへ聞わたる。火の様な風が吹いて體を焦すかと思へば、凍てつく様な寒風が忽ち吹き返し、氷柱

の雨火の雨交る代る頭上に集中し下り來る。漸くにして目を開き四邊を眺むれば虎、狼、熊、獅子等が食物に飢たる如き様子にて幾百とも限りなく一人のチームスの肉を食まんど狙めつけて居る恐ろしさ。忽ち「キャッ」と女の叫び聲、よく見れば妻のペリシナが獅子、虎の群に兩方より足を啣へられ吾目の前にて青竹割れにされ、群獸は忽ち寄り集つてパリ／＼と音を立て、残らずいがみ合ひ乍ら食つて了つた。

チームスは進退谷まつて運を天に任せ、觀念の眼を閉ぢて居る。暑さと寒さに殆ど人心地もなかつた。忽ち雷鳴轟き電光閃き渡り、チームスの身体は空中に捲き上げられ、フワリ／＼と幾百里とも知れぬ山河を下に眺め、火焰の濛々と立上る山の頂に落下した。黒煙は異様の臭氣を放つて瞬く内に彼の身体を包んで了つた。何處ともなく、

「目を開け！」

と大聲に呼はるものがある。怖々乍ら眼を開けば先に空中より下り來りし妖怪羅利は彼が前に二人の女の兩足をグツと左右の手に握り、頭を逆様にして崎驅たる岩の上にコツリ／＼杖をつく様に白搗いて居る。二人の娘はキヤ／＼と悲鳴をあけ苦しげに泣き叫ぶ。テームスは一言を發せんすれども、息寒がり舌つりあがり、ウの聲も出なかつた。羅利は巨眼を開き、聲を荒らけて云ふ、

羅利「汝、宿世の罪業によつて、現在の愛兒の血をすゝり、肉を喰ひ骨を粉にして食すべし。然らざれば汝も亦かくの如くなすべし」

と云ふより早く二人の女の頭部を力限りに岩に打ちつけメヂヤ／＼に碎いて了つた。テームスは止むを得ず肯づいた。羅利は姫の頭肉の斷片を竹筥の先に掬ふてはテ

ームスの口に捻ぢ込む。テームスは止むを得ず、之を食はざるを得なかつた。口は痺れ酸く苦く毒藥を呑む如き苦しさを感じた。羅利は大口開けて高笑ひ、

羅利「アハ、、、その方は今娘の肉を一口食つて味を知つたであらう。汝が祖先は玉置村の里庄として人民を苦しめ數多の貧者の膏血を絞り、汝が代になつては益々甚だしく、其富巨萬を重ね玉木の村に巍然たる邸宅を構へ、天地を畏れず、驕慢の限りを盡す不届者、吾は人民の怨讎團結してこゝに羅利として現はれしものぞ。いざ之よりは汝が精靈因体ともに石を以て叩きつけ、幾百の肉團となし、汝が爲に生前苦しめられたる精靈に分與すべし。さア早く此岩上に横はれ」

と罵り乍ら、その場に突き倒した。

かゝる處へ天の一方より靈光輝き來り、テームスが前に落下した。羅利は此火團に

驚いて何處にもなく姿を隠した。火團は忽ち一柱の神人となり化した。よく見れば鬼春別將軍が圓満具足なる靈衣を身に着し、莞爾として立つてゐる。テームスは打驚き初めて口を開き、

テームス 「あ、貴方は鬼春別様でございましたか。誠に失禮な事ばかり心の裡で思ひました。それ故祖先の罪と自分の罪とで斯様な處へ落されたのでございませう。何卒私の罪をお赦し下さいませ」

と手を合し涙を流して頼み入る。

鬼春 「拙者は御存じの通りバラモン教のゼネラル、鬼春別でござる。三五教の宣傳使治國別の一行の靈光に包まれ自我自愛の夢も醒め飄然として神の道を悟り、生き乍ら地獄道に陥落せし身を救はれ、吾精靈は神界の命によつてエンゼルとなり、今こゝに

治國別宣傳使の命によつて汝を救ふべく下り來れり。汝も今より吾に倣つて前非を悔い、神の御前に犯し來りし罪惡を陳謝せよ。然らば汝が娘も妻も神の恵みに救はるべし。夢々疑ふ勿れ」

と云ひ放ち紫の雲に乗つて囑院たる音樂の響と共に中天高く歸り行く。後見送つてテームスは名も知れぬ高山の上に跪き其勇姿のかくる、迄涕泣し乍ら合掌し悔悟の念に驅られつ、あつた。

俄に聞ゆる阿鼻叫喚の聲、テームスは何心なく谷底を見れば焰々たる猛火に包まれ嫌らしき妖怪や黒蛇の數限りもなく猛火に焼かれ悶々苦しむ泣き叫ぶ聲であつた。此山の麓は空地もなく火に包まれ、妖怪毒蛇が焼き亡ほされつ、あつた。翼なき身は空中を翔り此場を逃る、譯にも行かず、頻りに天津祝詞を奏上し神の救ひを祈りゐる。

か、る處へ雲に乗つて勢よく降り來る一人の神人がある。よくく見れば我家に逗留したる萬公である。萬公は莞爾として、その前に立現はれ軽く目禮し乍ら

萬公「舅殿、此谷底を御覽なさいませ。澤山な妖怪や毒蛇が焼き亡ほされてゐるでせうこれは皆テームス家の祖先が作つた罪業の化生した悪魔でムいますよ。又此萬公は貴方の祖先代々に苦しめられた憐れな人民の靈が凝結して萬公となり、此世に生れ來たものです。私はそれ故さうしてもテームス家の跡を繼いで此テームス家の財産を人民に平等に分配し罪を亡ほさねば、舅殿を始め祖先の罪は赦されずまい。お氣がつきましたかな。萬民の精靈が集まつて萬公と名を負ひ現界に生れたのですよ」

テームス「いや、さうも有難うムります。因果應報の道理によつて先祖代々地獄の苦みを受けるのも已むを得ませんが、三五教を奉じ玉ふ貴方が我家の養子となり、祖先

の罪を赦して下さるのなら、此位有難い事はムいません。併し乍ら、スミエル、スガールの兩人は悪鬼羅刹の爲に肉体を粉碎され、もはや現界には居りませぬ。さうして家を繼ぐ事が出来ませうか。娘がなくても養子になつて下さるでせうか」

萬公「御心配なさいませ。治國別の宣傳使がお守りあればスミエル、スガール兩人は極めて安全に肉体を保つてゐられます。さアこんな處に何時迄居つても堪りません私と一緒に歸りませう」

テームス「伴れて歸つて下さるか。あ、それは有難い。然し罪多い吾々、さうして此火焰の山を下る事が出来ませう」

萬公「いや宜しい。貴方も大變に足も疲れて居ります。私が背に負ふて歸りませう。僅か三千里ばかり走れば玉置村の宅へ歸れますから」

テームス 「何、三千里、大變に遠い所迄何時の間に来たのだらうな」

萬公 「精靈の世界では三千里や五千里は現界の一丁を歩行する暇もありません。さア

早く背をお抱へ下さい」

と手をつき出せばテームスは小兒の様な氣になり、

テームス 「あ、老いては子に従へだ。そんなら婿殿、宜しく頼みます」

萬公 「親が子に禮なんか云つたり、頼む必要はありません」

と云ひ乍ら甲斐々々しく脊に負ひ、猛々たる火焰の中をドン／＼と火傷もせず、矢を

射る如くに下り行く。

萬公に負はれて山を下れば、際限もなき青草茂る原野があつた。原野の眞只中を一海

千里の勢でトン／＼と駆け出せば、水晶の水を湛へた沼に行きあたつた。流石

の萬公も之には辟易して息を休め、思案を凝らさんでテームスを青芝の上にソツと卸し
し双手を合せて、

萬公 「三千世界の梅の花

一度に開く常磐木の

松の神世となりけり

顯幽神の三界を

救はせ玉ふ三五の

救ひの神と現れませる

國治立の大御神

豊國姫の大御神

神素蓋鳴の大神の

瑞の御魂に仕へたる

治國別の宣傳使

松彦、龍彦神司

萬公別が眞心を

隣れみ玉ひ今こゝに

現はれまして此沼を

首尾克く渡らせ玉へかし

朝日は照ることも曇ることも

月は盈つことも虧くることも

假令大地は沈むとも

神の恵みは常に

變らせ玉ふ事あらじ

守らせ玉へ 惟神

玉置の里のテームスが

世繼となりし萬公別

真心こめて神々の

御前に慎み願ぎ奉る

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

只何事も人の世は

直日に見直し聞直し

世の過ちを宣り直す

恵も深き神勅

仰ぎ敬ふ今日の空

救はせ玉へ 惟神

尊き神の御前に

親子二人が慎みて

救ひを願ひ奉る

あ、惟神 々々

御霊の恩頼を賜へかし」

かく歌ひ終るや際限もなき沼は忽ち變じて青疊となつた。テームスは目を開きよくく見れば鬼春別が讀經せし隣室に目を眩して倒れてゐたのである。治國別、鬼春別、松彦、龍彦其他の人々は枕頭に集まつて懇切に介抱をし、天の數歌を頻りに奏上してゐた。あ、惟神 靈幸倍坐世。

(大正一二、三、四、舊一、一七、於龍宮館、北村隆光録)

瑞 月

身はたこへ萬里の外におくとも

日の御子とます君は忘れじ

靈

婚

1105

第一三章 蘇

歌(二四二)

青菜もそよぐ夏の風

すき通りよき一室に

館の主 テームスは

鬼春別や久米彦の

心を疑ひ且つ憎み

たゞ一刻も速に

我家を出し呉れんずと

心は千々に逸れども

大恩受けし三五の

神の使の宣傳使

治國別の一行に

憚りながら胸押へ

一間の内に嘔け入りて

棕櫚箒に頬被

させて並べた四つ箒

未だ歸らねば神様に

お願ひ申して追ひ出し

家の禰除かんと

眞恚の心に惱まされ

鬼春別のゼネラルが

一心不亂に讀經する

隣の居間に身を忍び

一生懸命陀羅尼をば

腹に唱へて待ち居たる

忽ち身体震動し

頭は痛み胸つかへ

人事不省に陥りて

其精靈は逸早く

身体を内脱け出し

限りも知れぬ枯野原

寒風荒む地獄道

杖を力によほくと

涙と共に進み行く

道の傍へに立ち並ぶ

一つ家屋を見付け出し

一夜の宿をからんとて

立ち寄り見ればこは如何に

柱は腐り棟ゆがみ

悪獸惡虫往來し

我身邊を目標に

群がり來るいやらしさ

こりや叶はぬミテームスは

力限りに逃げ出せば

道の左右に怖ろしき

妖怪變化の現はれて

妖姿怪体現じつ、

獸の肉や人の肉

争ひいがみ喰ひ合ふ

其光景に仰天し

逃げんこすれど足重く

同じ所をぢたばた

汗を流して藻掻き居る

斯かる所へ中空より

雷鳴轟く怪聲が

耳を打つよと見る中に

惡鬼羅刹が現はれて

限り知られぬ夜叉惡鬼

從へ攻め來る怖ろしさ

極暑の風や極寒の

嵐に吹かれ何處もなく

身は中空に飛び散りて

遙彼方の山の上に

佇み居たる訝かしさ

忽ち聞ゆる阿鼻叫喚

よくく見れば山麓の

谷間々々に濃々

燃り上りたる大火焰

黒煙四邊を包みつ、

怪しき姿の精靈や

黒蛇なぞが火の中に

苦しき悶ゆる怖ろしさ

身の毛もよだつ計りなり

再び羅刹は現はれて

妻のベリシナ初めとし

スミエル、スガール兩人を

力限りに虐待し

身を引き裂きて血を絞り
 目も當られずテームスは
 両手を合せて大神の
 思ひし事も水の泡
 唯一言も轉び得ず
 天を焦して下り來る
 容色端麗比類なき
 よく／＼見れば三五の
 五色の衣を纏ひつゝ、
 種々雑多と靈界の
 砕いて喰ふ有様に
 悔悟の涙に暮れながら
 救ひを祈り奉らんご
 言靈車止まりて
 途方に暮れたる時もあれ
 一大火光は忽ちに
 大神人となりける
 神に仕ふる萬公が
 テームス爺に打ち向ひ
 因縁話を説き諭し

親子の契を結びつゝ、
 燃らば攢がりし火焰をば
 青草茂る大野原
 向つて駈け出す勇ましき
 背に負ふつて進む中
 前にピタリと行き當り
 皇大神を祈る折
 いと香ばしき青疊
 變りたるこそ不思議なれ
 四邊を見れば三五の
 背に脊負ひて濛々
 難なく分けて下りつゝ、
 一直線に東方に
 萬公別はテームスを
 際限もなき大沼の
 息を休めて手を合せ
 碧き湖沼は忽ちに
 テームス館の奥の間と
 テームス、ハツと氣がついて
 治國別を初めとし

松彦龍彦萬公や

鬼春別や久米彦の

軍の司を初めとし

妻のベリシナ、スミエルや

スガール、アーシス、アヅモスの

家の子迄が枕頭に

双手を合せ三五の

神の助けを祈り居る

眞最中と見るよりも

道のチームス自我を折り

執着心を放棄して

一切萬事三五の

教に任す事としぬ

あ、惟神々々

御慶幸倍ましましてよ。

チームスは四邊をキヨロ／＼見廻し乍ら、一同の我枕頭に端坐し祈願を籠めて居るのを見て、感謝の涙を流し乍ら、

チームス

「あ、ベリシナお前は此處に居たか、スミエルもスガールも無事であつたかア、結構々々、もうお前は悪鬼羅刹に引き裂かれ、殺されて仕舞ふたと思ふて居たに、まア結構であつた。夢ではあるまいかな」

ベリシナ

「爺殿確りなさいませ。貴方は今日を眩かして殆ど死んで居られたのですよ。

治國別様や鬼春別様、萬公さんを初め御一同の丹精によつて罪を赦され、再び此世の明りを見る事が出来たのです。早く神様初め皆様にお禮を申しなさい」

チームス

「あ、これは／＼御一同様、よくまア助けて下さいました。私は祖先代々よりの宿業によつて何とも形容の出来ぬやうな地獄に墮ちて参りました。罪程怖ろしいものはムいませぬ。貴方方がお出下さいませでしたら、チームス家の祖先を初め、子孫に至る迄一人も残らず八萬地獄に墮されて無限の責苦に遇はねばならぬ所

でムいました。娘のスミエルやスガールが猪倉山に囚はれ深い陥穽に墮し入れられ苦しめられたと聞いてから、鬼春別様、久米彦様外御一同の方が憎らしくなつて表面では素知らぬ顔をして居るもの、心の中は鬼の様に殺氣立ち、一時も早く我家を放逐したいと我情を張つて居りました。娘の囚はれたのも全く我々の祖先や子孫をお助け下さるためのお仕組だつたと云ふ事を深く悟りました。鬼春別様、久米彦様、其他の方々様、私の罪を何卒お赦し下さいませ。私は靈界に往つて貴方の清き尊き御精靈に助けられて参りました。又萬公さんも……飄々な落付のない困つた男だ、何程娘スガールが戀慕して居つても、こんな男をテームス家の養子にする事は出来ない、ちやと云つて娘の戀の醒めない中はさうする事も出来ない。一層の事毒害でもせうか……と心の中に誰しらす悪い考へを抱いて居りました。此罪も萬公

さん何卒赦して下さい。靈界に於て進退谷り苦悶の最中をお助け下さつたのは貴方の精靈でムいました。サアこれから此家を萬公さんと番頭のシーナさんに任せますから好きな様にして村人を助けてやつて下さい。テームスは財産に對してはもう少しの執着もありません」

鬼春別は涙を流し乍ら、

鬼春

「テームス様、よくも其處迄悟つて下さいました。拙者も治國別様の御教導によつて生乍ら地獄を逃れ天國に救はれ、因縁あればこそ、こうして假令一夜なりとも逗留させて頂いたのでムいます。又二人のお娘子を困らしめたのも、やつぱり我々が責を負はねばなりません。娘の親として我々をお恨みなさるのも決して御無理はムいません。貴方が箒を立て、早く歸れがしとお祈りして居られたのも幽かに私の

耳に響いて居りました。夫故態と貴方の耳に聞ゆるやうに聖經を讀誦し貴方の反省を促さんとして居た所、貴方は經力に打たれて人事不省におなりなされたのです。…あ、濟まん事をした…と、直様靈界に祈つて居りました所、よくまア蘇生して下さいました。何卒これで恨をスツカリと晴らして下さいませ」

テームス「ハイ勿体ない、そんなお言葉を聞きましては冥罰が當ります。貴方のお蔭で我々一族が無間地獄の苦しみを受けるのを脱れる端緒が開けたのでムいます。實に人間の怨恨程怖ろしいものはムいません。何卒これからは足らはぬ我々一族を可愛がつて御指導下さいませ」

と熱涙を浮べて合掌する。鬼舂別は嬉し涙に掻き暮れ物をも言はずしやくり泣きをして居る。エミシもスパールも神恩の有難きに感謝し言葉寒がり涙に暮れて居た。

治國「テームス殿、今回の幽界旅行によつて、因果轉生の道理がお分りになつたでせうなア」

テームス「ハイお蔭に依りまして後生の怖ろしい事を悟りました。唯人間は惟神のお道に従つて、世間愛や自然愛を超越し、神の愛に生き、善徳を積まねばならないものと深く悔悟致しました。さうして貴方のお弟子と思つて居た萬公さんは、深き因縁によつてテームス家の相續者となり、祖先以來の罪惡を拂拭し給ふ御方と深く悟りました。何卒、結構な宣傳使の隨行者なれ共、曲てテームス家の養子に與へて下さいませいか。折入つてお願い致したうムいます」

治國「萬公さんに異存さへなくば、私は些も構ひませぬ。道晴別、松彦、龍彦、貴方の意見は何うですかな」

道晴別 「神の道闇を晴らしてわけ上る

日の出の神の御旨なるらん」

松彦 「松の世の小天國を築かん」

神は萬公を下せしならん」

龍彦 「罪汚れ百の惱みをたつ彦の

教の開く基なるらん」

治國別 「有難し我三柱の珍の弟子

諸ひますも神心ならん。

いざさらばテームス夫婦スガール姫

萬公を君が家柱とせよ」

テームス 「有難し治國別の御言葉

慎み神に仕へ奉らん」

ペリシナ 「罪多きテームスの家も三五の

神の伊吹に清められける」

スガール 「村肝の心の底より愛したる

萬公別に添ふぞ嬉しき」

シーナ 「大神の御言畏みテームスの

家に誠の花は咲くらん」

スミエル 「惟神 結び給ひし縁なれば

我も仕へんシーナの君に」

アーシス 「治國別神の司の口をもて

結びたまひし縁ぞ尊し」

お民 「三五の月は御空に輝きて

我胸さへも晴れ渡りぬる」

鬼春別 「大空に輝く月の影見れば

笑ませ給ひぬテームスの家を照らして」

久米彦 「嚴御靈瑞の御靈は玉置の

テームス館に輝きたまふ」

スパール 「月清く大空青き今宵こそ

闇の晴れたる心地こそすれ」

エミシ 「バラモンの軍の司カーネルと

仕へし我も心嬉しき」

治國別 「テームスの家の響は今日よりぞ

月日の如く輝きまさん」

テームス 「罪多き我館をば清らけく

治めたまひし神ぞ尊き」

斯く互に述懐を述べ、和氣霧々として神前に額づき、各祝詞を奏上し、テームスが再生の神恩を感謝した。

窓の外には涼しき夏の風ヒチリキを吹いて穩かに通ふ、あ、惟神靈幸倍坐世。

(大正一二、三、四、舊一、一七、於龍宮館・加藤明子録)

第一四章 春

陽 (一四三三)

萬公は神殿に參拜を終り、一同の打解けて談話せる居間に神懸りとなつて現はれ來り謠ひ始めた。

萬公(謠曲調)「此世を造り玉ひたる 千早振る尊き神が現れまして

神の善惡正邪をば

立別け玉ひ人々の

心にかゝる村雲を

伊吹拂ひて天國を

此地の上に建設し

堅磐常磐の五六七の世

いや永久に榮わゆく

松の神世をたてんとて

天教山に現れませる

木花姫の神柱

コーカス山に現れませる

日出別やコーカスの

珍の館に永久に

教を守らせ玉ひつる

入島主を始めとし

自轉倒島に至りては

桶伏山の聖場に

錦の宮の太柱

太しき立て、皇神を

齋かひ奉り朝夕に

赤心籠めて仕へます

玉照彦の神柱

瑞の魂と現はれ玉ひ

玉照姫の神柱

殿の魂と現はれ玉ひ

暗夜を照らす英子姫

紫 姫と諸共に

此世の惡魔を龍國別や

其他百の司たち

神政成就の聖場と

定めて珍の御教を
 神素蓋鳴の大神の
 靈鷲山やエルサレム
 太しく立て、現身の
 努め玉ふぞ有難き
 入島主の部下となり
 入岐大蛇や醜鬼を
 誠一つの御教を
 松彦、龍彦、萬公を
 激しき野分に吹かれつ、
 四方に開かせ玉ひつ、
 御言畏み萬壽山
 黄金山に神柱
 暗世を永遠に照らさんご
 ウブスナ山の齋苑館
 月の御國に蟠まる
 言向和し三五の
 以て世人を救はんご
 従へまして河鹿山
 祠の森や山口の森

風荒ぶ荒野を涉り
 パラモン教のゼネラルと
 誠の道に言向けて
 道法禮節明かに
 尙も進んでライオンの
 ビクトリヤ城の刹帝利
 救ひ給ひて漸々に
 シメジ峠を乗り越えて
 月照る夜半に出でまして
 此家の娘スミエルや
 野中の森や浮木の森
 威勢輝くランチ片彦將軍を
 苦集滅道説き明し
 教へ玉ひて弟子となし
 清き水瀬を横切りつ
 左守の神の危難をば
 駒の蹄を列べつ、
 玉置の村のテームス館
 猪倉山に捕はれし
 スガール姫を救はんご

勇み進んで出で玉ふ

谷川涉り岩を越ね

漸う鬼春別將軍の

屯し玉ふ巖窟に

忍び入りつ、ゼネラルや

カーネル始め其他の

百の司を言向けて

道晴別やシーナの司

二人の娘を救ひまし

神の力に守られて

此家に歸り玉ひける

萬公別は此家に

進み來るや忽ちに

わが家に歸りし心地して

親の許しもなき儘に

主人氣取りと早變り

家内の上下隈もなく

巡視を了へし時もあれ

此家の主人チームスは

四人の負傷者の全快を

悦び玉ひ師の君に

感謝のためと海川や

山野に出で、求めたる

美味しき物を歡待して

感謝の誠を盡しつ、

鬼春別や久米彦將軍が

此場に居るに仰天し

心の底より憎惡して

一時も早く追つ拂ひ

後日の難を逃れんと

謀り玉ひし時もあれ

鬼春別が熱烈な

讀經の威力に打たれまし

靈肉忽ち脱離して

見ると怖ろし地獄道

寥しき旅に出でましぬ

あ、惟神々々

これが見捨て置かれうか

一度息を吹返し

靈肉共に改良し

未來は清き天國の
 果物實る樂園に
 神の柱の治國別が
 祈らせ玉へばアラ不思議
 萬公別や鬼春別の
 テームス司の後を追ひ
 救ひ歸りし嬉しさよ
 月は盈つとも虧くるとも
 三五教を守ります
 いや永久に忘れまじ
 いや永久に花も咲き
 救はにや置かぬと三五の
 赤心こめて大前に
 神徳忽ち顯現し
 靈を守る精靈は
 根底の國に飛び行きて
 朝日は照るとも曇るとも
 假令大地は沈むとも
 神の恵は永久に
 そもテームスの家筋は

元は尊き利帝利
 數多の民を従へつ
 民の恨の重なりて
 根本的に轉覆し
 玉置の村に現はれて
 住み來りしも十五代
 重ねくゝて遠祖
 罪の重荷に地獄道
 惡鬼の群に飛び込みつ
 實にも悲惨の極みなり
 ヒルナの國にときめきて
 武勇を誇りし家なれど
 ヒルナの國は忽ちに
 生命辛々フサの國
 茲に里庄となりすまし
 又もや民の怨恨を
 世々の祖等諸共に
 根底の國に墮ち行きて
 苦しき月日を送るこそ
 さはさり乍ら今日よりは

主人のテームス逸早く
 三五教の大道に
 如何なる祖先の罪科も
 夏の日向に晒されし
 遠津御祖は云ふも更
 此世乍らに天國の
 世人を救ふ生神と
 傳へん今日の端緒を
 御前に感謝し奉る
 靈幸倍ましましてよ」

悔改めて世を救ふ
 仕へ玉ひし上からは
 朝日に露の消ゆる如
 氷の如く溶け行きて
 子孫の末に至る迄
 清き生涯送りつ、
 成りて譽を萬代に
 喜び祝ひ大神の
 あゝ惟神々々

治國別は音吐朗々として宣傳歌を詠ふ、

治國別 (詠曲調) 「千早振る

すみきり守る神の國
 此地の上に寫しまし
 人をば地上に生み落し
 山川草木鳥獸
 天と地との神業に
 與へて降らせ玉ひたる
 斯かる尊き人の身に
 体主靈從の小慾に

神の造りし神の國
 高天原の天國を
 天に閃く星の如
 濱の真砂の数の如
 うろくづ虫まで生ませつ、
 仕へしめん神の水火
 人は神の子神の宮
 如何でか曲の潜む可き
 五感を曇らせたればこそ

天國淨土に歸るべき

清き身魂は墮落して

中有界や地獄道

譬へ方なき醜穢なる

餓鬼畜生の魔道へ

誤り墮ち行くものなれば

人は生命の有るうちに

悔ひ改めて天地の

神の心をよく悟り

利己一遍の自愛心

弊履の如く打すて、

至仁至愛の神徳を

身に備へつ、現世の

光ももなり鹽ももなり

穢を清め世を照らし

天地の花と謳はれて

此世の中を面白く

渡り行くべき者なるぞ

さはさり乍ら人の身は

如何なる智徳ありても

神の教に離れなば

善も變じて惡となり

幸も變じて災禍と

忽ち變る淺間しき

唯人の世は天地の

神の教を第一に

守りて百の事業に

いそしみ仕へ現世に

ありては國の楯となり

神靈界に至りては

天津御國の良民と

なりて神業に仕ふべく

今より神の大道を

踏み外さずに進むべし

神は吾等と俱に在り

神は汝と共に在す

神に受けたる此身魂

如何で棄てさせ玉ふべき

テームス司を始めとし

百の人々皇神の

愛と善との徳により

心を清め身を淨め

信と眞との光明に

輝き渡りて村肝の

心の空に日月の

光を照らさせ玉ふべし

あゝ、惟神々々

神の御前に三五の

治國別の神司

謹み敬ひ宣べ傳ふ

と謠ひ終り、尙も諄々として現界、神界、幽界に處するの道を説き、終つて大神の御前に感謝の祝詞を奏上した。是よりテームス夫婦は心の底より神の恩恵を悟り、廣大なる邸宅を開放して、立派なる社殿を造り、三五教の大神を鎮祭し、萬公別をして神教を宣傳せしむる事となつた。而して萬公はスガール姫を妻となし、テームス家の世繼となり、シーナは姉のスミエルと共に分家して之に住み、アーシス、お民も亦治國

別の媒介に依つて夫婦となり、玉置の村の花と謳はれ、三五の教を四方に宣傳し、神業に参加した。

(大正一二、三、四、舊、一、一七、於龍宮館、外山豊二録)

瑞 月

天時地利得人和 今丈夫救民立霸
是宇宙神聖之命 義軍嚮所若竹破

春 陽

第一五章 公

盜 (一四二三)

鬼春別以下三人のバラモン組は治國別に許されて、宣傳使と俗人との中間的比丘となりスツバリと長髪を剃りおとされ、チームスの心遣ひに依つて、黒衣を仕立て、着せられ、金剛杖をつき乍ら、照國山ビクトル山の谷間に山伏の修業をなすべく、軍用に使つた法螺の貝をブウ〜と吹立て乍ら、道々宣傳歌を歌ひ進み行く。鬼春別には治道居士、久米彦には道貫居士、スパールには素道居士、エミシには求道居士といふ戒名を興へた。治道居士は今や治國別、チームス其他一同に別れを告げんとして歌を詠んだ。

治道「皇神の授け給ひし靈魂をば

治めんとして教の道ゆく。

いざさらば百の司よチームスよ

安くましませ千代に入千代に

治國別「大神の惠の露を踏みしめて

安く行きませ清めの瀧へ」

道貫「玉鐸の道の誠を貫きて

神の御楯と仕へ奉らむ。

神司「此家の主諸共に

守らせ給へ吾身の上を」

チームス「三五の誠の道に目醒めたる

公 盜

人こそ神の幸を受けなむ」

素道「惟神元の心に立返り

救ひの道を進みゆくかな。

猪倉の山にこもりし曲神も

神の光に照されて行く」

松彦「皇神の珍の御子たる君こそは

安く行きませ神のまに〜」

求道「朝夕に誠の教を求めつ、

今日は嬉しき神の道行く。

諸人よ安くましまして我去りし

あとも神を崇めまつりて」

龍彦「皇神の恵を受けてテームスの

笛を出づる人ぞ尊き」

萬公「いざさらば四柱の君健に

身を守りつ、神に仕へよ」

道晴別「惟神神の正道わけゆけば

醜の曲津もさわらざらまし」

シーナ「君行かばあゝに残りし吾々は

淋しさに鳴く時鳥かな。

さり乍ら治國別がましますさば

安く出でませ心残さで」

スミエル 「益良夫が心の駒を立直し

鞭うち進む今日ぞ勇まし」

スガール 「時めきし軍の君も三五の

神の軍に仕へ玉ひぬ」

アヅモス 「皇神の縁の糸に結ばれし

親しき友を送る今日哉」

アーシス 「チームスの筋に残る吾身こそ

君の行衛を惜みつ、泣く」

お民 「國民を天津御國に救ふべく

出でます今日の姿雄々しき」

鬼春別 「有難し百の司の真心は

幾千代までも忘れざらまし」

互に歌もて應答し乍ら、圓頂縮衣の四人連れ法螺貝をブウ／＼吹きたて、山野の空
氣を清め乍ら、別を惜み出で、行く。

三千餘騎を引率し 猪倉山に屯して

暴威を揮ひし將軍も 忽ち悔悟の花開き

神の恵を嬉しみて 治國別に服ひつ

四人の男女を惹なく テームス筋に送りつけ

至玄至妙の御教を 心に深く刻みこみ

昨日に變る修験者

山伏姿となり變り

金剛杖を力こし

細き野道を辿りつゝ

世間心や自愛心

秋の木の葉の風に

散りて跡なき真心の

衣の袖を科戸邊の

風にフワ／＼いちらせつ

大法螺貝を吹き乍ら

勇み進んで北の森

祠の前に立寄りて

暫し息をば休めける

日はズッポリと暮れ果て、

咫尺辨ぜぬ眞の暗

四人はこゝに一夜をば

明さんものと裳を布き

まぎろむ折しも古ほけた

祠の後に人の聲

耳にこめたる治道居士

ハテ訝かしと窺へば

濁りを帯びた人の聲

三つ四つ五つ聞に來る。

治道居士は他愛もなく三人の寝てるのを、寢息にて悟り乍ら、自分は四五人の怪しき聲に眠られず、耳をすまして聞いてゐた。

祠の後からはだん／＼大きな聲が聞に來て來だした。

甲「オイ、サッパリ約束らんぢやないか、エ、ン、よう考へて見よ。折角俺は軍曹にまでなつたと思へば、肝心の大将が腰拔だから、あの通り惨めな態になり、三五教にスッパリと兜を脱ぎ、チツと許りの涙金位貰つたつて、國へ歸つて妻子を養ふ譯にもゆかず、これからどう身の振方を考へたらよからうかな」

乙「俺達は斬り取り強盜の軍國主義に育てられて來たものだから、今更外の職業につ

かう云つたつて、何にも出来んぢやないか。泥棒になるのも、バラモン軍の兵士になるのも、名こそ違へ、大小の區別がある丈だ。追剥ぎをして人を裸にするのも澤山の軍隊を率れて敵國を蹂躪し、他人の國を併呑するのもヤツバリ泥棒だ。幸に斯うして軍刀も持つてゐるのだから、一つ馬賊團でも組織して大に發展せうぢやないか」

丙「オイ兩人、そんな馬鹿な事を思ふものぢやない。將軍様が下さつた此金を儉約して歸れば、國許へ歸つて何か一つの生産事業を起すとか、眞面目な商賣をして、両親や妻子を喜ばした方が何程可いか知れんぞ。將軍でさへも改心をなさつたのだから、俺達も之を機會に善心に立返らうぢやないか」

乙「ヘン馬鹿云ふない。詐僞本位の産業や算盤持てば人を騙さうとする商賣が、それが何算いのだ。産業立國とか云つて、ゼントルメンとやらが、盛に議論をしてるやうだが、ヤツバリ彼奴等も体のよい泥棒だ。大會社だつて、大商人だつて、皆詐僞と泥坊の體のい、奴だ。寧ろ陰惡主義の實行者だ。泥棒様は堂々たる陽惡を行ふのだから、同じ罪惡と云つても氣が利いてるぢやないか。善の假面を被つて世の中を誑かし、私利私慾を企む位、陰險な卑怯な惡魔はないぢやないか」

丙「そう云へばそうかも知れぬなア、そんなら俺も損者三友といふ事があるが、損か得か知らんが、今迄の交際上、お前たちに共鳴して、泥棒會社の重役にでもならうかなア」

乙「馬鹿云ふな、吾々は益友だ。益者三友だ。オイ、丁、戊汝は何うだ。此方の意見に共鳴するか。今日只今より泥棒の開業だ。汝不服とあれば泥棒の初商ひに、持

物一切を剥ぎ取つてやるから有難く思へ」

丁「そ、そ、そんな無茶な事を言ふものでない、泥棒をしたい者は親や子のある者とするこつちやない。俺達は親もあれば子もあるのだから、何卒此儘に助けてくれ。なア戊、お前もそうだらう」

戊「ウン、私も老母が一人残つてるのだから、親一人子一人だ。「毎日日バランモン大神に……吾子が立派な人間になりますやうに、人の物が欲しいといふやうな根性になりませぬやうに……」と祈つてるから、悪い心は出してくれな」と家を出る時に俺の袖にすがつて意見したのだから、これ丈は御免蒙りたいなア」

乙「アハ、……腰拔だな。そんなら今日は開業祝に、汝等兩人は大目に見てやる。其代りに懐に持つてる金を半分許り此方へよこせ。大難を小難にまつりかへて

やるのだから……」

甲「オイ乙、此奴等五人は今迄兄弟同様にしてゐたのだから、スッパリと許してやれ又此處に居れば澤山人が通るから、幾らでも商賣は出来るから」

乙「オイ、丁、戊兩人、今日は見逃してやる、汝に軍刀を持たしておく、氣違ひに刀物を持たしたやうなものだ。なまじひ、道徳に捉はれて、天下の爲に害悪を除くのだなご、氣が狂ひ、俺等の寝首をかくかも知れないから軍刀を此方へよこせ」

丁戊「これは故郷へ土産に持つて歸り、家の寶とするのだから、決してお前達の首を狙ふ氣遣ひはない。何卒、スッパリと今日は見逃してくれ」

乙「エ、そんなら、汝と俺とは今日から國交斷絶だ。サ、一時も早く公使館を引上げるのだ。シート〜〜」

丁「居留民は何う致しませうかな」

乙「エー、キヨル（居留）くせずに、早く退却せんかい、汝は最早敵國の人民だ。シート〜〜」

丁成は暗の道を無性矢鱈に、星影を力にし乍ら、命カラ〜逃げて行く。

治道居士は此囁きを聞いて、珠數をつまぐり乍ら聲も涼しく、

治道「或被惡人逐一 墮落金剛山一 念彼觀音力一 不能損一毛一

或值下怨賊繞一 各執刀加と害一 念彼觀音力一 咸即起慈心一

乙一 生懸命に念じ出した。

甲「オイ、何だか氣にくわん事を言ふぢやないか。觀音の力を念じたら、賊が忽ち改心すると云つてゐるやうだ。オイ何だか、幸先を折られたやうで、餘り氣持が

宜うないぢやないか、チツとコラ、思案をしなをさなるまいぞ」

乙「馬鹿云ふな、念彼觀音力もあつたものかい。そんなこと、屁でもないワイ。尻喰へ觀音力だ。そんな弱い事で、生存競争の泥棒社會に紳士として立つて行く事が出来るか、馬鹿だなア。この糞坊主が知らんが、俺達が怖さに慄ひ上つて、仕様もない無形無聲の觀音を拜んだつて、天教山の木花姫はメツタに降臨遊ばす氣遣ひはないワ。サア、幸い、鳥が來よつたのだから、彼奴だつて、チツと位旅費は持つてるだらう。商賣初めだ。コリヤ、甲、丙、チツと勉強せんかい。あ、大商店の主人になるぞ、氣の揉める事だワイ。人を使へば苦を使ふ。命掛の商賣をせうと思へば、さうしても乾分に確りした奴がゐなくぢや駄目だ」

乙小聲に呟き乍ら、治道居士の聲を目當に近より行く。始めての泥棒の事とて、強い

事を口で云つてゐても、何處にもなしに手足がワナ／＼と慄へてゐた。甲内兩人も同じく慄ひ乍ら乙の後に跟いて行く。祠の前には雷の如き駭が聞けて居る。

乙「コ、コラ、キ、キサマは、ド、ドコの奴ぢやい。サ、最前から、観音を、拜んでゐよつたが、そんな事で、ビクつくやうな泥棒さんぢやないぞ。サア、持物一切を、綺麗、サッパリと、此處で脱いで……下さいませんか……ウン、違ふ／＼、脱いで、渡さぬかい。厭ぢやなんぞと吐すが最後、汝の素ッ首ひつつかまへ、笠の臺をチョン切つて炊いて食て了うてやるぞ。俺を何方と心得てる。バラモン教に於て驍名かくれなき鬼春別將軍の部下ベル、シャル、ヘル三人だ。サ、綺麗サッパリと脱いだり／＼。コラ、シャル、ヘル、汝もチツと加勢を致さんかい……千騎一騎の場合だぞ。親方許りに働かすといふ事があるか」

ヘル「そうだから、こんな商賣は止めといふのだ」

ベル「乗かけた舟だ。今となつて卑怯未練にやめられるかい。鬼春別様の顔に泥を塗るやうなものだ。鬼春別様は堂々として三千の軍隊を引率して、強盗強姦放火まで遊ばしたでないか。運がよければ人の國まで占領せうといふ大泥棒さんだ。そのの乾分たる俺達が、そんな弱い事でさうならうかい」

ヘル「それでも、將軍様は神様の爲、國家の危急を救ふ爲に、敵を亡ぼすべくお出でになつたのだ。つまり云へば天下公共の爲の泥棒だ。一身一家の利害の爲になさるのぢやないから、一概には云へまいぞ。そんな事思つてると、却て將軍様の顔に泥を塗るやうなものだ」

ベル「エー、弱い奴だな。コリヤ修験者……か何か知らんが、くたばつたをみわて、念

彼觀音力もほざかぬやうになつたでないか。サア、とつと持物を渡したり〜」

治道「拙者は治道と申す修験者でゐる。併し乍ら衣類を渡す譯にはいかぬ。こゝに金があるから、之を其方に遣はす。一時も早く國元へ歸り、泥棒を思ひ切つて、正業についたが宜からうぞ」

ベル「ヤア、此奴、中々氣の利いた事を言ひやがるワイ、オイ百兩や二百金の目腐れ金で、遠い道を歩いて國へ歸れば、後にや何にも残らない。一体幾ら渡すといふのだ」

治道「これつきり、泥棒をせないといふのならば、相當に金を渡してやらん事はない。幾らくれと云ふのだ」

ベル「ウーン、一寸待つてくれ。一つ計算をせんと分らんワイ。……これからハルナの近

在まで歸る迄には、何程儉約致しても一人前百兩の金が入る。それから母者人の土産に百兩、女房の土産に二百兩、子供の土産に百兩、都合五百兩だ。併しそれでは無一文で商賣は出來ない。何程ちつほけな入百屋店を出しても、入百屋だから八百兩はいる。そうすると一人前千三百兩、都合三千九百兩だ。そこへ千圓は着物代として此方へ綺麗サッパリと渡せばよし、四の五の吐すと命も共にバラして了ふぞ。バラすのはバラモンの特色だ」

ベル「モシ〜旅のお方、餘り厚かましう申しますけれど、此奴は云ひかけたら聞かん奴ですから、何卒半分でも宜しいから惠んで下さいませまいかな。のうシャル、皆貰ふのは餘り厚かましいぢやないか」

ベル「エー、傍から茶々を入れやがつて、主人の商賣を番頭が邪魔するといふ事がある

か、氣の利かない奴だなア」

治道

「四千九百圓は四と九がついて、面白くない。ドツと張込んで五千兩やるから、之を持つて早く國許へ歸り正業に就いたが可いぞ。そして鬼春別、久米彦其他のカーネルは何れも三五教の誠の道に歸順したのだから、お前達も國へ歸つたら神様を信仰し、假りにも人の物を盗んだり、今迄のやうな殺伐な事はキツとするでないぞ。サ、手を出せ、此處に五千兩の包みがある、檢めて受取つたがよからうぞ」

ベルは怖れ乍ら、聲を知るべに手をニユツと出した。鬼春別の治道は、其手をグツと握つた。

ベル

「アイタ、、、オイ皆の奴、大變手の利いた奴だ。チツと来て加勢をしてくれんかい、中々金をくれそうにないぞ」

治道

「アハ、、、面白いく、泥棒の失敗も又旅情を慰むるには一興だ。併し乍ら俺も男だ。五千兩恵んでやるに云つた以上は、メツタに後へは引かぬ。道貫、素道、求道殿、貴方もい、かゆんに目を醒ましなさい。面白い事が出来て居りますよ」

道貫

「ハ、、、イヤ最前から、吾々三人は厭をかいで様子を考へて居りました。随分困つた奴ですな。三千人の中では、こんな奴もタマには出来るでせう。併し乍ら貴方は五千兩やりますか、然らば私も一千兩やりませう」

ベル

「イヤ、何處の何方か知りませんが、有難うムります。何卒御姓名をお聞かせ下さいませ」

治道

「ウン、俺は治道といふ修験者だ。お前に千兩やらうといふは道貫といふ男だ。一時も早く國許へ歸つて正業に就いたがよからうぞ」

「ハイ有難う」と幾度も禮を云ひ乍ら、メル、シャル、ヘルの三人は六千兩の金を二千兩づつ、分配し喜び勇んで此祠を暗に紛れて立去つた。

(大正一二、三、四、舊一、一七、於龍宮館、松村汎澄録)

瑞 月

山は裂け海は潤る、とも世を思ふ

我魂の光らざらめや

人類愛その爲なればそくばくの

なやみ來たるとも厭はざるべし

第一六章 幽

貝 (二四二四)

鬼春別の治道居士

道眞素道求道居士

此四柱の修験者

北の森をば立出で、

ブー／＼と法螺の貝

吹き立て山野の木精をば

響かせ乍らスタ／＼と

杖を力に進み行く。

治道居士は北の森を立出で、三人と共にシメジ峠の南麓に着いた。これから先は非常な難所が處々にある。人通りさへなき晝猶暗き樹木の茂る阪道を喘ぎ／＼登り乍ら足拍子をとり歌ひ行く。

「猪倉山の峰つゞき

此處は名に負ふシメジ坂

駒も通はぬ阪道を

神の手綱に曳かれつゝ

沙門の姿に身を變へて

至善至上の神の道

治めて世人を救はんこ

心の駒に鞭撻つて

吾々四人は登り行く

ハア~~~~~きつい阪

御一同氣をつけ成されませ

もしも轉落した時は

折角神に許された

照國山の荒行も

サツバリ駄目になりまする

あ、惟神々々

昨日に變る今日の空

ハア~~~~~ウン~~~~~

實に騒がしき蟬の聲

そのひぐらしの杣人も

容易に渡らぬ此阪を

登るは苦しき様なれど

山と積みてし罪科を

神の御水火に祓はれて

榮え久しき天國に

上りて行かん首途に

思ひまはせばハア~~~~~

何程阪は峻しども

如何でか怯まん惟神

進めば廣き平地あり

此難關を乗り越えて

花爛熳と開きたる

神の御園に進みなば

今絞り出す汗脂

苦もなくこゝに拭き取られ

神の御國のエンゼルと

此世ながらに健やかに

仕へて神と道のため

世人のために面白き

尊き餘生を送り得ん

惡逆無道の軍人

今は心も和らぎて

大慈大悲の彌勒神

恵みの露を蒙りつ

ビクの神國を指して行く

あゝ、惟神々々

神の恵みの深くして

吾行く道に曲もなく

悪き獸の災いも

あらずに進ませ玉へかし

駒曳きつれて此阪を

下りし時のハア／＼／＼

吾勢に比ぶれば

今は天地の相違あり

悪鬼羅刹は忽ちに

仁慈無限のエンゼルに

變化したるも三五の

神の司の御賜物

仰げば高し久方の

天津御空に照り渡る

月日の恵みいと清く

四方の草木はスク／＼／＼

茂り榮わて天國の

姿を寫す樂しさよ

あゝ、惟神々々

神のまに／＼進む身は

何處の空に至ることも

如何でか恐れん敷島の

大和心の照る限り

心も身をも筑紫潟

高砂島の果て迄も

進みて行かん神の道

守らせ玉へ 惟神

ウントコドツコイドツコイシヨ

天地の主と現ませる

皇大神の御前に

慎み畏み願ぎ奉る

エミシの求道居士は汗をタラ／＼流し乍ら一行の前に立つて元氣よく歌ひ乍ら上り行く。

求道

「春は花咲き鳥歌ひ

茂り榮ゆる夏の日も

木枯荒む冬の空

包まれ月日を隠せきも

再び春が来る時は

いと美はしき花ぞ咲く

これの地上に生れたる

移り變らぬ事やある

數多の軍兵指揮なして

今は全くハア〜〜

草木の末も青々こ

いつしか越えて秋の風

満天忽ち雪雲に

聽て一陽來復の

又もや山野は爛熳こ

世の有様を眺むれば

人の身魂も何時しかに

バラモン軍のカーネルこ

威張り散らした此エミシ

神の教に目を覺まし

執着心を放擲し

救ひの道に進み入り

体得したる嬉しさよ

月は盈つこも虧くるこも

神に任せし此躰

翻さんや惟神

照國山の谷間で

神の御徳を身に享けて

月照彦の大神の

いや永久に開くべし

現幽神界一体の

至善至上の御教を

朝日は照るこも曇るこも

地異天變は起るこも

如何でか初心をドッコイショ

神に任せし此躰

百日百夜之行修め

世人を救ふ比丘となり

守らせ玉ふ月の國

あゝ惟神 々々

御靈幸ひましませよ」

かく歌ひ乍らシメジ峠の頂上に達した。風に曝されて洒落きつた面白い松の木が六七本並んでゐる。四人は松の根に腰打掛け汗を拭ひ乍ら少時息を休めてゐる。

治道「見渡せば四方の山々青葉して

心も清く晴れ渡るかな」

道貫「ライオンの川の流れば彌遠く

帯の如くに見ねにけるかな」

素道「見渡せば何處も同じ天國の

姿なるらん青々として」

求道「大空も大地の上も青々こ

綾を翳して塵もこどめず。

年老ひし松の木蔭に休らひて

汗拭き拂ふ峰の夏風」

治道「吹く風は天津神國の神人の

御水火なるらんいとも涼しき」

素道「苦しみて漸くこゝに登り見れば

涼しき風の吾を待ちぬる」

道貫「いざさらば此阪道を下りなん

つどかせ玉へ神司等」

求道「これよりは愈下り阪なる

されき身魂は神國に上る」

かく歌ひ乍ら四人は危き阪道を一步々々注意しつゝ下り行く。

道貫は又歌ふ。

道貫「バラモン教の久米彦三

世に謳はれし將軍も

時世時節の力にて

心の駒を立て直し

自ら鞭撻つ膝栗毛

ビク／＼／＼／＼ビクの國

比丘の姿に身を糞し

心の鑑も照國の

山の谷間に立向ひ

谷間を落ちる岩清水

鼓の瀧に身を打たせ

汚れ果てたる垢離をこり

靈肉ともに清淨に

立直したるその上で

ピクトル山の神殿に

参拜なして今迄の

犯せし罪を悉く

謝り詫びてピクトリヤ

王の御前に参向し

過ぎにし春の無禮をば

拜謝しまつり三五の

誠の道の教へ子に

仕へまつらん吾心

守らせ玉へ惟神

國治立の大神の

御前に慎み願ぎ奉る

朝日は照ることも曇ることも

月は盈つことも虧くることも

假令大地は沈むことも

誠の力は世を救ふ

今まで悪を盡したる

心の暗き久米彦も

忽ち日出の守護となり

吾精靈は天國に

上りて神の榮光に

仕ふる身はなりにけり

あ、惟神々々

神の恵みを慎みて

喜び感謝し奉る

素道は阪を下り漸く平地に着いて元氣を恢復し、人並に歌はねばならぬと思つたか
妙な皺枯れ聲を出して一歩々々拍子をこり歌ひ初めた。

素道「三五教の宣傳使

治國別に助けられ

誠の道を悟りてゆ

今迄つゞけし罪業が

いと恐ろしくなり來り

死後の生涯ある事を

思へば短き現世にて

小さき慾に踏み迷ひ

名利の奴隷となるよりも

一切萬事執着の

衣脱ぎ棄て、比丘となり

生れ赤兒となり變り

此世を捨てし修験者

本來此世は無東西

何處有南北是宇宙

色即是空の世の習ひ

空即是色の眞諦を

漸く悟り吾々は

劍を棄て、言靈の

神の依さしの御劍に

持ち直したる嬉しさよ

ブー／＼／＼と法螺の貝

吹き鳴らし行く嬉しさは

此世に生きて人慾に

囚はれ居たる人の身の

轉迷開悟の聲聞いて

目を覺ましたる鬨の聲

そも法螺貝と云ふ奴は

生たる時は聲もなし

死んで死散となりし時

生言靈の息により

大なる聲を張り上げて

遠き近きの山彦を

驚かし行く健氣さよ

吾も現世に住まひては

いとも小さきものにして

呼ばはる國は四方の國

轟く術もなれども

此世を去りて靈界に

復活したる其時は

此法螺貝じやなれども

其言靈は彌高く

高天原に鳴り渡り

中有界や地獄界

彷徨ひ苦しむ身魂をば

いとも尊き天國へ

導き悟す瑞祥こ

喜び勇み吹き立てる

ブー／＼／＼／＼ブツ／＼／＼ あ、惟神々々

御靈幸ひませせよ」

かく歌ひ乍ら四人は列を正しうしてピクの國へは立寄らず、直ちに荆棘茂る山道を分けて照國山の谷間、清めの瀧に向つて一目散に進み行く。

死んでから大い聲出す法螺の貝。

改心の言靈を吹く法螺の貝。

(大正一二、三、四、舊一、一七、於龍宮館、北村隆光録)

瑞

月

月は今谷底深くひそみつゝ

望なす三五の明光貯ふ

幽 貝

二七一

瑞月

人殺しなぞの重罪犯したる

人ご毎朝廊下往くかな

氣の荒い囚はれ人ご同行する

役所の庭の足の重さよ

からかいを半加^{なかば}へて看守等が

吾を迎へつ神さんと言ふ

第四篇 法 念 舞 詩

第一十七章 萬

巖 (一四二五)

玉置の村のテームスは治國別の教を聞いて今迄の貪慾心や執着心を弊履を捨つるが如くに脱却し、廣き邸を開放し村人の共有とし、且つ山林田畑を村内に提供して共有となし、茲に一團となつて新しき村を經營する事となつた。先づ大神の神殿を造營すべく村人は今迄テームスの持ち山たりし遠近の山に分け入つて木を切り板を挽き、日夜赤心を盡し、漸くにして一ヶ月を経たる後假宮を造營し、大神を鎮祭する事となつた。治國別は村人に教を傳ふべく、又この神籥の完成する迄神勅に依つて待つ事とした。數百人の老若男女は悦び勇みて社前に集まり、この盛大なる盛典に列した。治國別は祭主となり神殿に向つて祝詞くづしの宣傳歌を奏上した。

治國別

久方の天津御空の高天原に 鎮まり居ます大國常立の大神

神伊邪那岐の大神伊邪那美大神 嚴の御靈の大神、瑞の御靈の大神

を初め奉り、天津神國津神 八百萬の神達の御前に

三五教の神司治國別の命 清き尊き珍の御前に慎み敬ひ

畏みくも申さく 高天原の月の御國を知し召す

瑞の御靈の大御神 日の神國を知し召す

嚴の御靈の大神は 現身の世の曇り汚れ罪過を

科戸の風に吹き拂ひ 速川の瀬に流し捨て

清き麗しきミロクの御代に立直さんご 神素蓋鳴の大御神に

千坐の置戸を負はせたまひ 産土山の聖場に

齋苑の館を立て給ひ

千代の住所ご定めつ

神の御言を畏みて

遠近の國々に珍の教を完全に

開かせ給ふ有難さ

百の司を初めごし

四方の國人達は

皇大御神の大御恵を

喜び仰ぎ奉り

早風の如く潮の打寄する事の如く

神の御前に伊寄り集いて

神の賜ひし村肝の心を錬り鍛へ

百の罪汚れ過を

拂ひ清めて天地の

神の柱ご生れ出でたる人の身の務めを 完全に委曲に盡し終へんご

勵しみ仕ふる勇ましさ 掛卷も畏き皇大神の儼有ぎ給ふ

豊葦原の千五百秋の瑞穂の國は 生言靈の幸はふ御國

四七〇

生言靈の助くる御國

生言靈の生ける御國にましませば

天の下に生こし生ける民草は 日に夜に心を研き身を謹み

神の賜ひし珍の言靈を祀り上げ奉り 假にも人を罵らず

譏らず嫉まず憎みなく 睦び親しみ兄弟の如く

現世に生永らへて 日々の生業を樂しみ仕へ奉り

神の依さしの大御業に 仕へ奉るべき者にしあれば

三五教の御教を 夢にも忘るゝ事なく

朝な夕なに省みて 神の御國の幸ひを

完全に委曲に受けさせ給へし 皇大神の大前に

謹み敬ひ願ぎ奉る 下つ岩根に千木高く

仕へまつりし此宮の いとも廣くいとも清けきが如く

いや永久に いづの玉置の村人は

テームスの村司を親と崇め 各自の生業を

いそしみ勤めて大神の 御前に勤功を奉り

家内は睦び親しみて 恵良々々に歡ぎ賑ひ

茂り榮わしめ給へ あゝ惟神々々

御靈幸倍ましますと

斯かる所へ村の若い衆と見わて赤鉢巻を締め乍ら、鐘や太鼓を叩きつゝ、千引の岩を車に載せ、神の御前に奉らんと、大綱を老若男女が握り乍ら汗をタラ／＼流しつゝ、歌を唄つて進み來る其勇ましさ。(以下()内はワキ)

「(エンヤラヤー、エンヤラヤー) 三五敎の神司

治國別の宣傳使 (ヨイイ〜、エンヤラヤー)

天津御空の雲別けて 玉置の村に下りまし

(ヨイイトセー、ヨイイトセー) (エンヤラヤーのエンヤラヤー)

慾に抜目のない爺 テームスさんを説きつけて

(ヨイイ〜、エンヤラヤ) も一つそこらで(エンヤラヤー)

(ヨイイ〜、ヨイイトナ) 皆さん揃ふても一つぢや

昔の昔の先祖から 慾をかはいて溜め置いた

山も田地もすつかりと (ヨイイ〜、エンヤラヤ)

玉置の村へ放り出して 上下なしに安樂な

生活をせよと云はしやつた 時節は待たねばならぬもの

(ヨイイ〜、エンヤラヤ) 皆さん揃うても一つぢや

(ヨイイ〜、ヨイイトセ) 廣き邸を開放して

尊き神の宮を建て 老若男女が睦び合ひ

今日は目出度い宮遷し (ヨイイ〜、エンヤラヤ)

(ヨイイトセ、ヨイイトセ) 皆さんそこらで一氣張り

(ヨイイ〜、ヨイイヤナ) これから玉置の村人は

今度新にお出ました 萬公さんの若主人に

心の底から服従し 上下揃うて神様の

御用を廻み日々の 野良の仕事や山仕事

喜び勇んで務めませう

(ヨイイ／＼エンヤラヤ)

(エンヤラヤーのエンヤラヤー) 皆さんこゝらで一氣張り

千引の岩は重くとも

大勢が心を一つにし

力限りに曳くならば

何程甚い阪だにて

神の守りに安々ぞ

学愚を曳くよに上るだらう

(ヨイイ／＼エンヤラヤ)

(エンヤラヤーのエンヤラヤー)

抑々玉置の村人は

昔の／＼神世から

この神村を住所とし

ウラルの神の御教を

守り来りし人ばかり

(ヨイイ／＼エンヤラヤ)

(エンヤラヤーのエンヤラヤー) ウラルの神さんごうしてか

幾何信心したこても

此こもお蔭を下さらぬ

テームスさんが唯一人

お蔭を横取許りして

我等一同の汗膏

絞つて樂に日を暮し

榮耀榮華にやつて居た

(ヨイイ／＼エンヤラヤ)

(エンヤラヤーのエンヤラヤー) それをば黙つて見てゐる

ウラルの彦の神さんは

此頃盲になつたのか

但は聾になつたのか

村の難儀を知らぬ顔

(ヨイイ／＼エンヤラヤ)

(エンヤラヤーのエンヤラヤー)

皆さん揃うて一氣張り

(ヨイイ／＼エンヤラヤ)

此度救ひの神様が

天の河原に棹さして

治國別名を變へて

玉置の村に下りまし

我等一同を救はん

仁慈無限の御教を

宣らせ給ひし嬉しさよ

(ヨイイ〜エンヤラヤ)

(エンヤラヤーのエンヤラヤア) これから玉置の村人は

飢に苦しむ人も無く

凍れて死ぬる人もなし

上下運否のないやうに

ミロクの御代が築かれて

喜び勇んで暮すだらう

(ヨイイ〜エンヤラヤ)

(エンヤラヤーのエンヤラヤー) 此神殿に祭りたる

救ひの神は嚴御靈

瑞の御靈の神柱

柱も清く棟高く

御殿も宏く風景は

勝れて絶佳の御場所よ

(ヨイイ〜エンヤラヤ)

(エンヤラヤーのエンヤラヤー) 捻鉢巻の若い衆よ

早階段に近づいた

もう一氣張り〜

お聲を揃へてヨイイヤナ (ヨイイ〜エンヤラヤ)

(エンヤラヤーのエンヤラヤー)

と唄ひ乍ら方形の大岩石を社の傍に据わた。これは村人が……此岩石の腐る迄は心を堅く變へませぬ、何處迄も御神の爲に盡します……と云ふ赤心の供へ物である。

萬公は村人と同じく捻鉢巻をし、運んで來た石を適當の場所に据わんとして二三人の部下と共に槌を振り上げ、大地をドン〜と固め、杭を打つて石のいゝ込まないやうに勤めて居る。相方が交互に歌を唄ひ乍ら拍子をこつて居る。

萬公「神と神との引き合せ

(ドーン、ドーン、ドーン、ドーン、ドーン)

玉置の村の里庄さん

テームスさんの若主人

萬公司も現はれて

今日の目出度いお祭りを

力限りに祝ひませう

(ドーン、ドーン、ドーン)

打てよ打てよ、確り打てよ

地獄の釜の割れる迄

今打つ槌は神の槌

槌が土うつつ面白さ

(ドーン、ドーン、ドーン)

玉置の村の皆さんが

キールの谷から千引岩

毛綱に括つて引き來り

尊きお宮の御前に

信と眞の光をば

現はし給ふた目出度さよ

(ドーン、ドーン、ドーン)

大神様の御利益で

テームス爺は云ふも更

此村人は永久に

尊き此世を樂しんで

聖磐常磐に玉の緒の

命を保ち心安く

家も豊に榮わませう

(ドーン、ドーン、ドーン)

これから村中心をば

一つに合して田を作り

山には木苗を植付けて

(ドーン、ドーン、ドーン)

共有財産澤山と

造つて子孫の末迄も

(ドーン、ドーン、ドーン)

寶を残り身を治め

心を清めて神様の

尊き教に心従し

此世を安く頼もしく

(ドーン、ドーン、ドーン)

千引の岩の御靈もて

惡魔を拂ひいつ迄も

ビクビクも動かぬ鐵石の

信仰勵もぢやないかいな

(ドーン／＼ドーン／＼)

さうやら準備が出来たよだ

皆さんも一つ頼むぞや

(ヨイ／＼エンヤラヤ)

(エンヤラヤーのエンヤラヤア) 力の強い若い衆は

挺をば四五本持つて来て

千引の岩を此上に

何卒据わて下されよ

萬公別が頼みます

(ヨイ／＼エンヤラヤ)

(エンヤラヤーのエンヤラヤア)

朝日は照るども曇るども

轟き渡る瀧の水

洗ひ洒した此身体

神の御前に奉り

捨身供養を勵みませう

あゝ惟神々々

(ヨイ／＼エンヤラヤ)

(エンヤラヤトのエンヤラヤア)

神の御心畏みて

村人心を一つにし

今日の祭を恙なく

済ませた事の嬉しさよ

玉置の村は萬世に

玉置の宮と諸共に

榮に盡きせぬ事だらう

喜び祝へ諸人よ

(ヨイ／＼エンヤラヤ)

(エンヤラヤーのエンヤラヤア)

(大正一二、三、四・舊、二、一七、於龍宮館、加藤明子録)

第一八章 音

頭 (一四二六)

アヅモスは赤手拭ひで鉢巻をし乍ら、群衆に交はつて手を拍ちつ、圓を畫いて宮の前の廣庭に音頭を取り踊り始めた。

アヅモス (音頭口調) 「ハーヤー夕陽傾きて (エンヤットコセー)

無常を告ぐる鐘の音も (コラシヨ)

みろく三會の曉の (コラシヨ)

目醒めの聲を聞ゆなり (ア、ヨイセー、ヤットコセー)

社前を照らす銀燭の (コラシヨ)

光映ゆき照り渡り (ア、ヨイセー、ヤットコセー)

治國別の神司

救ひの神を現れまして (コラシヨ)

三五教の御教を

完全に委曲に説き玉ひ (ア、ヨイセー、ヤットコセー)

玉木の村の里庄が家に (コラシヨ)

止まり玉ふ尊さよ (ア、ヨイセー、ヤットコセー)

猪倉山の巖窟に (コラシヨ)

巢を構へたるバラモンの

鬼春別や久米彦も (ア、ヨイセー、ヤットコセー)

神の力に敵し得ず

兜を脱いで降参しー

(ア、ヨイイセー、ヤツトコセー)

髪切り落し比丘となり

金剛杖に墨衣オー

(ア、ヨイイセー、ヤツトコセー)

身に纏ひつゝ四人連れ

此家を後に出で、行くウー

(ア、ヨイイセー、ヤツトコセー)

後に残りし治國別は

(コラシヨ)

御供の神の松彦さん

(ドツコイ)

道晴別や龍彦のオー

(ア、ヨイイセー、ヤツトコセー)

珍の司と諸共に

玉置の村の守り神

(コラシヨ)

テームス館に宮柱アー

(ア、ヨイイセー、ヤツトコセー)

太しき立て、大神を

(コラシヨ)

鎮め玉ひし尊さよオー

(アトヨイイセー、ヤツトコセー)

殊に目出度き萬公別

此家の主人となり玉ひ

(コラシヨ)

スガール姫を娶らせてエー

(ハアヨイイセー、ヤツトコセー)

鷺鷥の契の幾千代も

萬公末代變りなく

(コラシヨ)

暮らさせ玉へ惟神

(コラシヨ)

神の御前に願ぎ奉るウー

(ア、ヨイイセー、ヤツトコセー)

それにまだく目出度きは (コラシヨ)
 スミエル姫にシーナさん (ドツコイ)
 三國一の婿となりイー (アー、ヨイイセー、ヤットコセ)
 萬公さんと相列び (コラシヨ)
 里庄の家を継ぎ玉ひイー (ア、ヨイイセー、ヤットコセ)
 此村人を何時迄も (コラシヨ)
 恵み助けて三五の
 教の道を立て玉ふオー (ア、ヨイイセー、ヤットコセ)
 目出度い事が重なれば (コラシヨ)
 これほき重なるものかないなア (ア、ヨイイセー、ヤットコセ)

番頭さんのアシスさんは (コラシヨ)
 雲井に近き御方の
 珍の御胤と聞わたる
 お民の方を妻に持ちイー (アー、ヨイイセー、ヤットコセ)
 玉木の村にましまして (コラシヨ)
 治國別の神様の
 教を守り此宮の (コラシヨ)
 神の司となり玉ふオー (ア、ヨイイセー、ヤットコセ)
 其の瑞祥を悦びて
 老若男女の別ち無く

之の館に相集ひ

歡喜の涙にむせ返るウー

あ、惟神 々々

神の御前に謹みて

深き恵を感謝しつ

手拍子揃ひ足並揃ひ

拍手うつて踊りつ、

悦び祝ひ奉るウーウ

まだく先はあるけれど

あまり長いのは御退屈

(ア、ヨイイセー、ヤットコセ)

(ア、ヨイイセー、ヤットコセ)

私はこれで休みます

次の御先生に御頼み申すヤアア (ア、ヨイイセー、ヤットコセ)

道晴別は祭服を脱ぎ捨て、踊り子の中に飛び込み、音頭をとりつて躍り始めた。

道晴別 (ア、チヨイ〜)

私は道晴別司 (ア、チヨイトコセー)

三五教の神様に (ア、チヨイトコセー)

御仕へ申して十四年 (ア、チヨイトコセー)

齋苑の館やエルサレム

黄金山や靈鷲山

コーカス山へも参拜し (ア、チヨイトコセー)

誠に尊い御神徳

身に稟けまして治國別の

珍の司の宣傳使

御供に仕へ奉りつゝ

齋苑の館を立出でて

河鹿峠を打渉り

曲の棲處と聞わたる

山口森に立寄つて

一夜を明す折もあれ

忽ち光る鬼火を眺め

(ア、チヨイトコセー)

(ハ、チヨイトコセー)

(ア、チヨイトコセー)

(ア、チヨイトコセー)

胸轟かし居たる折

頭に三徳頂いて

蠟燭三本立列べ

鏡や鉄を胸に吊り

チャン~~~~~ピカ~~~~

怪しの姿がやつて来る

不思議な奴だ怪しんで

胸轟かす眞最中

アこれから先が面白い

まだ~~~~先はあるけれど

(ア、チヨイトコセー、ア、ヨイトサー)

(ア、チヨイトコセー、ヨイトサー)

後の御方に御氣の毒

これにて御免を蒙りませう

(ア、チヨイトセー、ヨイトサー)

ハーレヤーレコレワノサ

ヨーイ、ヨイトサ

次の御先生に御渡し申す

(ア、チヨイトコセー、ヨイトサー)

音頭

「イヤ、ヤットコシヨ

踊

「コリヤドシタイヤイ

音頭

「イヤま一つヂヤ

踊

「イヤまだかいヤイ

龍彦

「後見送りて宣傳使

(エンヤットコセー)

暫し言葉も無かりしがアアア (ア、ヨイトセー、ヤットコセー)

女房松姫尻目につけ

(コラシヨ)

コリヤ女房

(ドツコイ)

其方は神の使と云ひ乍ら

其天職を忘れたかアアア (ア、ヨイトセー、ヤットコセー)

此松彦は神様の

(コラシヨ)

尊き使命を蒙りて

(コラシヨ)

治國別の弟子となり

(ア、ヨイトセー、ヤットコセー)

悪魔の征討に上り行く

(コラシヨ)

音頭

其首途をつかまへて (コラシヨ)

待てと申すは何の事オー (ア、ヨイイセー、ヤットコセ)

聞きわけないと突放す

松姫顔を赤らめてエー (ア、ヨイイセー、ヤットコセ)

イヤのう、モーシ松彦さん (ドッコイ)

女乍らも宣傳使

夫の後を追っかけて

さうして御用が出来ませうかアアア (ア、ヨイイセー、ヤットコセ)

女房の心も察してたべ (ドッコイ)

悲しいわいなと泣き、伏してエー

輪廻に迷ふ淺間しさ

松彦涙を打拂ひイー (ア、ヨイイセー、ヤットコセ)

今の別れは辛けれ (コラシヨ)

暫く忍べ道芝の

露さへ乾く例ありイーイー (ヨイイセ、ヤットコセ)

治國別の師の君が (コラシヨ)

後を慕うて進み行き (コラシヨ)

浮木の森で追ついでエーエー (ア、ヨイイセ、ヤットコセ)

功名手柄を世に照らし (ドッコイ)

尙も進んで月の國

ハルナの都に立向ひイーイー（ア、ヨイイセー、ヤットコセ）
イツの籠へ復り言

申さによ置かぬと出でて行く（コラシヨ）

後見送りて松姫はアアア（ア、ヨイイセー、ヤットコセ）

常磐の松の下かきに（コラシヨ）

いよりか、つて聲を上げエーエー（ア、ヨイイセー、ヤットコセ）

モーシ〜我夫さま（ドツコイ）

一日も早く神界の

御用をすませ玉はりて（コラシヨ）

無事な御顔を見せてたベエーエー（ア、ヨイイセー、ヤットコセ）

頼むワイなと聲限り

便りを松姫小夜姫がアア（ア、ヨイイセー、ヤットコセ）

領巾振山のオー〜悲しみも、

わが身の上を歎きつ、

別れを惜む可憐さアアア（ア、ヨイイセー、ヤットコセ）

流石勇氣の松彦も（コラシヨ）

妻の愛惜子故の暗（ドツコイ）

泳へかねてかハラ〜（ドツコイ）

涙は落ちてエーエーエー河鹿川、

堤も崩る、ばかりなりイーイー（ア、ヨイイセー、ヤットコセ）

其松彦は長驅して

治國別の師の君に

浮木の森にめぐり會ひ

茲に師弟は手を曳いて

ライオン河を打渡り

ピクトル山の麓なる

珍の都の刹帝利

左守の神の危難をば

救ひ助けし健氣さよ

治國別の師の君の

(コラシヨ)

(ア、ヨイセー、ヤットコセ)

(ア、ヨイセー、ヤットコセ)

(ア、ヨイセー、ヤットコセ)

(コラシヨ)

(コラシヨ)

(ア、ヨイセー、ヤットコセ)

大神力は云ふも更

國治立の大神様

神素蓋鳴の神様の

深き守りによるものぞ

此龍彦も相共に

神の御道を歩みつゝ

ビクの國をば立出でて

漸く此處に来て見れば

玉置の村のテームスが

二人は魔神に捕らへられ

(コラシヨ)

(コラシヨ)

(ア、ヨイセー、ヤットコセ)

(コラシヨ)

(ア、ヨイセー、ヤットコセ)

行方、知れぬと聞きしよりイーイー (ア、ヨイーセー、ヤットコセ)

三五教の宣傳使

松彦、龍彦、萬公さん (コラシヨ)

三人の伴を引連れて (コラシヨ)

神のまに／＼夜の道

上らせ玉ひし勇ましきアアア (ア、ヨイーセー、ヤットコセ)

神徳忽ち現はれて

バラモン教のゼネラルや

カーネル始め百軍 (コラシヨ)

一人も残らず言向けてエーエー (ア、ヨイーセー、ヤットコセ)

玉置の村に歸りまし (コラシヨ)

清き教の數々を

里庄の夫婦に教へつ、

天國淨土を地の上に (コラシヨ)

築かせ玉ひし尊さよオーオー (ア、ヨイーセー、ヤットコセ)

神の恵みも赫灼に

現はれ玉ひ今此處に (コラシヨ)

瑞の御舎建て玉ひ

皇大神を永久に

コラシヨ (ドクコイシヨ)

齋き奉りし嬉しさよオーオー (ア、ヨイイセー、ヤットコセ)

あ、村人よ、 (コラシヨ)

尊き神の御前に

心を清め身を浄め (コラシヨ)

朝な夕なに参詣で

靈の恩頼を頂げよオーオー (ア、ヨイイセー、ヤットコセ)

此龍彦は師の君に (コラシヨ)

従ひ奉り明日よりは (コラシヨ)

ハルナの都へ立向ひイイイ (ア、ヨイイセー、ヤットコセ)

神の依さしの神業を (コラシヨ)

仕へ奉りてウブスナの

山にまします大神の

御前に復命致すべしイイイ (ア、ヨイイセー、ヤットコセ)

いざこれよりは皆様に (コラシヨ)

御苦勞になりし御禮を (コラシヨ)

かねて御暇仕まつるウーウー (ア、ヨイイセー、ヤットコセ)

次の先生に御渡し申すヤーアー (ア、ヨイイセー、ヤットコセ)

と音頭取りと踊り子が遷座式の神酒に酔ひ、歡喜に浮かされて圓を造り、夜の更くる迄踊り狂ひ賑々しく祭典の式を納めた。是より治國別、道晴別、松彦、龍彦の四人は、テームス一家に暇を告げ、一先づエルサレムを指して足を速めて出でて行く。あ、

惟神 靈幸倍坐世。

(大正一二・三、四、舊一、一七、於龍宮館・外山豊二錄)

瑞 月

限りなき廣野かけりし白龍も

狭き岩屋に潜む今日哉

白龍の潜む間こそ雨もなく

風さねもなし惟神にて

一日も早く白龍放つべし

世の爲道に爲と思はゞ

第一章 清

瀧 (一四二七)

火熱烈しき太陽は

天津御空に晃々ど

照國岳の谷間に

高くかゝれる大瀑布

清めの瀧の片邊

小さき庵を結びつ、

二人の男が朝夕に

裸となりて何事か

聲を限りに祈り居る。

此兩人はベルツ、シエールの主従である。左守神並にタルマンの爲に右守の職を剝奪され、百日の閉門を申付けられ、根み骨髓に徹し、妖幻坊の魔法を習つて、ピクトリヤ城を轉覆し、再び勢力を盛り返し、自分は刹帝利となり、シエールを左守神に任

じ、一國の主權を握らんと、一心不亂に水垢離をこつてゐたのである。七日目の夜、二人が一生懸命に水垢離をこつてゐると、山岳も崩る、許りの大音響と共に、白馬に跨り、宙空より蹄の音憂々と降つて来たのは緋衣を着た坊主姿であつた。これは妖幻坊の兄弟分と聞わたる妖澤坊といふ魔神である。妖澤坊は二人に向ひ、

妖澤「汝はビクの國の右守神を勤めたるベルツ並に家令のシエールであらう。汝の願は速に聞届け得せん。付いては百日百夜の水行をなし、食物は此谷川に棲息する蟹、蠓、蛙を餌食となし、其他の物は一切食ふ可らず。若し誤つて他の食を取る時は、汝の行は全く水泡に歸すべし。又百日の修行中、人に發見されたる時は折角の修行も無効となるべし、必ず用心怠る勿れ。此荒行が濟めば、汝に空中飛行の術を授け、且千變萬化の化身の法を教ゆべし、ゆめく疑ふ勿れ」

と嚴かに傳へ、山岳を揺がし乍ら、再び駒の首を立直し、空中高く姿を消した。二人は有難涙にくれて妖澤坊の後姿を合掌し、呪文を唱へてゐた。三十日許り修行をした時、ベルツは蛙、蠓、蟹の毒が中つたのか、俄に腹痛を起し、手足を藻掻き、泡を吹き出した。シエールは一生懸命に、

シエール「ウラル彦命 妖澤坊様、何卒主人の病氣をお癒し下さいませ」

と瀧壺に打たれて、又もや一心不亂に荒行にか、つてゐる。ベルツは虚空を掴んで苦み悶れる。此体を見てシエールは命限りに瀧壺に飛び込み、祈念を凝してゐた。そこへ十一二才の美はしき女、木の茂みを分けてスタ／＼と登り來り、忽ち赤裸となつて瀧壺に飛込んだ。シエールはエンゼルが自分の祈りを聞いて、助けに來て呉れたものと思ひ、一生懸命に乙女の姿を伏拝み、感謝の涙にくれてゐる。乙女は二人の男に目

もかけず、瀧壺に飛込み一心不亂に

乙女「大國常立の大神、何卒々々、父の病氣を救はせ玉へ、假令我身の命は取られませう共、少しも苦しうは存じませぬ。今父が亡くなつては、又もや右守神のベルツ主従が、如何なる事を致すか知れませぬ。ピクの國の一大事でムいます」

と神言を奏上し、祈り始めた。されど瀑布の轟々たる水音に遮られて、乙女の何事を願ひ居るやは、兩人の耳に入らなかつた。シエールはベルツの側に進み寄り、頭を撫で乍ら、

シエール「モシ旦那様、御安心なされませ。今私が妖澤坊をお願ひ致しましたら、アレあの通り、天女が天降られて、貴方の病氣平癒の爲に瀧壺にか、つて祈念をして下さいます。キツと御病氣の直る瑞祥でムいませう。必ず御心配下さいませぬ。」

南無妖澤坊大明神守り玉へ幸ひ玉へ」

と涙交りに願ひる。ベルツは不思議にも此言葉を聞くより、神經作用か知らね共、俄に氣分がよくなり、頭をあけて瀧壺を見れば、花を欺く美はしき乙女が瀧壺に打たれて、白い体を曝し乍ら、一心不亂に念じて居る。ベルツは吾身の苦痛も忘れ立上りベルツ「掛巻も畏き天津御國より下らせ玉うた天津乙女様、何卒々々拙者の願望を御聞届け下さいますやうに、之に付いては體が資本でムいますから、此病氣の一時も早く全快致し、百日百夜の修行が無事に了ります様、御願ひ申します」

と両手を合せて頼み入る。乙女は一生懸命に
乙女「父の病を癒させ玉へ」
と祈願するのみであつた。稍あつて乙女は瀧壺を上り、身体の水を拭き取り、キチン

と衣服を着替へた。四邊を見れば二人の男が禪一つになつて、一生懸命に灌壺を拜んでゐる。乙女はスタ／＼と歸り行かうとするを、二人は慌て、行手に跪き、

ベルツ 「天津乙女様、如何でムいませうか、妖澤坊様の命令に仍つて、百日百夜の荒行を致し、大望を達せんと願つて居りますが、神様のお蔭で成就するものは存じませんが、かやうに病氣になつては、如何ともする事が出来ませぬ。何卒御指圖をお願ひ致します」

乙女 「其方の願望とは如何なる事か、詳しく陳述せよ」

ベルツ 「ハイ、私はビクの國の右守神ベルツと申す者、之なる男は家令のシエールと申す者でムいます。ビクトリヤ城内には悪人はびこり、左守神一味の者、三五教の悪宣傳使を城内に引ずり込み、拙者の軍職を解き、專權の限りを盡し居りますれば、

乙女 「汝の敵と見なすは左守一人であるか」

ベルツ 「左守は申すに及ばず、利帝利の老老、其外アール、ハルナ等の悪人を征伐致さねば到底天下は無事に治まりませぬ」

乙女 「ホ、、、其方が噂に聞いた悪虐無道のベルツ主従であつたか。左様な悪企を致す共、到底成功の望みはあるまい。さうじや今の内に悔ひ改めて眞人間になる氣はないか」

ベルツ 「へー、それは何でムいます。決して私慾の爲に致すのではムいません。天下公共の爲に、民の苦しみを助くる慈愛心より、身を犠牲にして、かゝる荒行を致して居るのでムいます」

シエール 「天津乙女様、何卒々々、吾々の靈をよくくお調べ下さいまして、正邪の御
裁判を願ひます」

悪人は自分のやつた事を少しも悪く思つて居ない。天下國家の爲に最善の努力を盡
してゐるを考へてゐるらしい。

乙女 「妾は汝の言ふ如き天津乙女ではない。ビクの國の利帝利ビクトリヤ王の娘ダイヤ
姫であるぞよ。左様な悪虐無道な企みを致すよりも惟神の本心に立返り、忠良な
臣民として、國家に盡したら何うだ」

ベルツ 「ナニ、其方が敵と付狙ふビクトリヤ王の娘であつたか。エー、天津乙女と見誤
り、尊い頭をメツタ矢鱈に下げたのが残念だ。妖澤坊のお示しには、此行中に人間
に見付けられては、折角の荒行が水泡に歸するとの事であつた。エー、モウ破れか

ぶれだ。吾願望の届かぬとあれば、仇の片割れ、鬪殺に致して、怨みを晴らして
くれん。オイ、シエール、荒繩を以て此女を縛り上げよ」

と厳しく命すれば、シエールは、
シエール 「ハイ畏まりました」

と棕櫚繩を取つて、後手に括り、櫂の枝に引かけて、宙空に吊り上げる。乙女は腕も
むしれん許りの痛さを、齒をくひしぱり目を塞いで一言も發せず、堪えて居た。

ベルツは之を眺めて心地よけに打笑ひ、

ベルツ 「アハ、、、小ちつべ奴が、こんな所へ俺等の行方を嗅付けてやつて來やがつ
たのだな、此奴ア大變だ。此奴を歸なせば、キツと後から左守のハルナ奴、軍隊を
率ひて俺達を召捕に來る算段であらう。王女の身として、かやうな所へ出て來るに

は大膽至極、之には何か仔細があるであらう。一度吊り下し、拷問にかけて云はし
てみやう、サア下せ」

と嚴命すれば、シエールは又もや綱を緩めて地上に下した。ダイヤは已に目を眩かり
齒をくひしぼつてゐる。

シエール「ヤア、チヨロ臭い、モウ、たいひあがつたとみわる。モシ旦那様、此奴ア駄目
ですよ、物を言ひませんがな」

ベルツ「ナアニ、今目を眩かした所だから、瀧壺へ一遍つゝ込め。蛇の叩き殺した奴で
さへも、水へ漬ければすぐに蘇生るものだ。サ、早く放り込んでみよ」

「ハイ」と答へてシエールはダイヤ姫の身体を引抱へ、綱を解いて、瀧壺へザンブ
と許り投込んだ。ダイヤはハツと氣がつき、瀧壺を這ひ上り、其處邊をキヨロ〜見

廻し、赤裸のまま、逃げんとするを、シエールはグツと細腕を握り、以前の櫂の根本に
引摺り來り、

シエール「コリヤ、ダイヤ姫、幼き女の分際として、斯様な所へ只一人修行に來るとは
大膽至極、之には何か仔細があるであらう。吾々兩人が照國山に、王家轉覆の祈願
を凝し居る事を嗅ぎつけ、やつてうせたのであらう。サ、逐一白狀致せ。包み隠す
に於ては、其方を水責、火責、劍責に致すが、それでも可いか」

ダイヤ「無禮千萬な、主人の娘を捉へて左様な脅迫を致すといふ事があるか。チツと天
地の道理を考へて見よ」

ベルツ「エー、喧しい、天地の道理を考へるやうな者が、ピクトリヤ城轉覆の修行を致
すものかい。サ、早く事實を白狀致せ。何を願ひに來たのだ。其願の筋から第一に

聞いてやらう」

ダイヤ「此照國山は妾兄妹六人が永らく住居してゐた馴染のある所だ。父の御病氣を平癒させんが爲に、清めの瀧へ水垢離をこりに來たのだよ。臣下の身分として主人のする事をゴテ／＼いふ權利があるか、控へて居れ。年は若く共、ビクの國利帝利の娘だ。エ、汚らはしい、一時も早くきつかへ姿を隠せ。執拗歸らんに於ては線香を立て、燻べてやらうか」

シエール「丸切り青大將が座敷へ這上つた時のやうに言つてゐやがる。こんな女つちよに脅迫されて、此荒男の顔が立つものか、地異天變もこゝ迄行けば極端だ。地震ゴロ／＼雷ビリ／＼とやつて來たやうだ。併し乍らさう考へても、こんな美しい女をムザ／＼殺すのは勿体ない様だ。オイ、ダイヤさん、物も一つ相談だが、何程お

前が王女だといつても、位の高いのは實地の時の間に合ふものでない。荒男二人と格闘すれば、到底お前は殺されねばなるまい。蛇と蛙のやうなものだから、茲は一つ思案をし直して、日那様の奥方となり、ビクの國の女王となつて暮す考へはないか」
ダイヤ「惡逆無道の謀叛人奴、エ、汚らはしい、下りおらう」

ベルツ「何と云つても美しい者だ。そしてこれ丈の膽力があれば、此女を女房にすればどんな事でも出来るだらう。イヤ、ダイヤ姫様、茲は一つお考へ直しを願ひます。左守神といふ奴は表面忠義らしく見せて居りますが、彼こそ心中深く野心を包藏する曲者でムいますぞ。利帝利様は左守神に誤られ、ビクの國家を棒に振らうとしてゐる。危険至極な今日の場合、眞の忠臣が現はれて支へなくては、萬代不易の王家は續きますまい……大忠は不忠に似たり、大孝は不孝に似たり、大信は偽りに似

たり、大善は大悪に似たり……といふ事がありませう。表面大悪人と見做されたる此ベルツ位、王家や國家を憂ひて居る者はムいませんぞ。チツと冷靜に胸に手を當てて、王家と國家の爲にお考へを願ひたいものです。よく考へて御覽なさい。貴女の父上は左右の奸臣に誤られ、大切な五人の王子迄悉皆殺さうとなさつたぢやありませんか。何處の國に親が子を愛せない者がありませんか。何が實だと言つても、吾子位實はない。其實を殺さうとなさるのだから、決して之はお父上の心から出たのではムいませぬ、皆左守やタルマンの入れ智慧でムりまするぞ。かやうな悪人を重用するは實に危険千萬でムりまする。貴女はお若いので、城内の様子を御存じムいますまいが、それはくタルマン、キニピットの兩人は天地容れざる大悪人です。ムいますよ。さうか此急場を救ふ爲に、幸貴女は王家のお血筋、此右守と夫婦に

なり、國家の大難を未然に防ご考へはありませんか」

ダイヤ 「エ、つべこべと、汝の邪智佞辯聞く耳は持たぬ、汚らはしい。王家がさうならうが、國家が何うならうが、構つてくれな。何事も天の時節だ。汝等如き有苗輩の關知する所でない。大きにお世話だ、さがり居らう」

と嚴然として言ひ放つた。ベルツ、シエールは、

「最早駄目だ、兩人左右より寄つてか、つて、可哀相乍ら、殺害してくれん」

と大劍を引抜き、左右より切つてか、るを、ダイヤは身をかわし、飛鳥の如く刃を潜り、樫の大木を小楯に取つて防ぎ戦うてゐた。

斯かる所へブウくくく法螺貝を吹き乍ら、四人の山伏、

「衆生被厄、無量苦遍身、觀音妙智力、能救世間苦、具足神通力、廣修智方便、

十方諸國土、無刹不現身、種々諸惡趣、地獄鬼畜生、生老病死苦、以漸悉令滅、一
 と観音經を唱へ乍ら登つて來る。ベルツ、シエールの兩人は四人の姿に驚いて、ダイ
 ヤを捨て、着物をか、わ、山上目がけて、荆棘茂る中を雲を霞と逃げて行く。此
 山伏は治道、道貫、素道、求道、四人の修験者であつた。

(大正一二、三、五、舊、一、一八、於龍宮館、松村眞澄録)

瑞 月

瑞御靈神の使の甲斐もなし

教の御子に救はる、身は

第二十章 萬

面 (一四二八)

ビクトリヤ城の評議室にはタルマンを初め左守神のキユピット、ハルナ、右守神のエ
 クスが首を鳩めて秘々相談會を始めてゐる。

左守

「タルマン殿、寸善尺魔の世の中に申してバラモン軍が退却致し、やれ一安心と思

ふ間もなく再び右守神のベルツ、シエールが叛逆軍に取圍まれ、國家已に危き所、

尊き三五教の宣傳使一行に助けられ、これにてビクの國家も刹帝利家も大磐石と思

ふ折、六人の王子女が歸られて益々萬代不易と喜んで居つた所、此度の刹帝利様の

俄の御病氣、その上ダイヤ姫様が又もやお行衛が分らなくなり再び城内は黒雲に包
 まれたも同然、貴方は日夜玉の宮に専仕される以上は、此御病氣の原因や姫様の御

行衛がお分りでムいませう。一つ御意見を聞かして頂き度いものですな」

タルマン 「何分にも神徳の足らぬ拙者の事なれば、ハッキリした事は申上げ兼ねますが

刹帝利様の御病氣は生靈の崇りと存じます」

左守 「なに、生靈とは何者の怨靈でムるかな」

タルマン 「察する所、前右守神のベルツ、シエールが怨靈と察します。拙者が神殿に於て祈願の最中、煙の如く兩人が現はれ鬼の様な顔をして刹帝利様を呪めつけて居りました。屹度彼奴の生靈に間違ひムいますまい」

左守 「して、その兩人の所在は分つて居りますか」

タルマン 「ハイ、何處だかハッキリは分かりませんが、拙者の靈眼に映じた所によれば、

澤山な魔神に誑惑され、深山の巖谷に分け入り大瀑布にうたれて刹帝利様を呪咀の

荒行を致して居る様でムいます」

左守 「その地名は分かりませんか。地名が分らねば、せめて此城内から何方に當ると云ふ方角位は分るでせうな。さうして姫様の行衛はまだ見當がつきませぬか」

タルマン 「ハイ、何でも姫様もその瀧ヘソツと刹帝利様の御病氣を癒さんため荒行においでになつた所、ベルツ、シエールの兩人が左右より姫様を打殺さんと大刀を揮つて攻めかけてゐる。姫様は大木の幹を楯にこり飛鳥の如く防ぎ戦ふてゐなざる場面が靈眼に映じました。併し乍ら地名と方角はまだ分かりません。あ、斯う云ふ時に治國別様か、お弟子の一人でも居て下さつたらハッキリ分るであらうに、……あ、惟神 靈幸倍坐世。心の曇りたるタルマンに、何卒々々靈眼を開かせ下さいまして、ハッキリした事をお知らせ下さいます様三五の大神様、慎み畏みお願ひ申します」

と両手を合せて祈願して居る。然し如何しても地名や方角はタルマンの靈力では感知する事が出来なかつた。

左守「はて、困つた事だ。如何したら王様の御病氣が全快致し、姫様が無事にお歸り下さるであらう」

ハルナ「皆様、これから吾々一同が玉の宮へ参拜致し、兎も角無事で姫様がお歸りになる様、刹帝利様の御全快遊ばす様、一生懸命願はうぢやありませんか」

左守「ヤ、それは誠に結構でゐる。第一左守、右守が命を神様に捧けて、刹帝利様の御病氣の平癒を祈らねばなるまい。之が臣たるもの、道だ。さア右守殿、貴方も用意なされ」

右守「ハイ、承知致しました。私の考へでは王様の御病氣も日ならず御全快遊ばし姫、

様も近日無事にお歸り遊ばす様な氣分が致します。併し乍ら左守の神様は御老体、ハルナ様が御名代としてお詣りになれば宜しからう。貴方はビクトリヤ家の柱石、王様のお側をお離れになつてはいけません。吾々三人が参拜致し御祈願を凝らす事に致しませう」

左守「然らば拙者は王様のお側を守つて居りませう。御苦勞乍ら早く玉の宮へ御参詣を願ひます」

タルマンは「畏まりました」とハルナ、右守と共に急ぎ玉の宮へ参拜と出掛けた。後に左守は只一人双手を組んで思案にくれてゐる。

そこへ慌たどしく受付のトマスと云う男、襖をソツと開き両手をつき乍ら、トマス「左守神様に申し上げます。只今三五教の宣傳使のお伴をして來られた萬公さんが

六人連れで玉の宮へ御参拜になり、左守神様に一度お目にかゝり度いと云つてお越しになりました。如何致したら宜しうムりませうかな」

左守「ウン、三五教の萬公さんが見たか。や、それは有難い。併し乍ら治國別様は御出ではなつてゐないか。治國別様や松彦、龍彦様ならば斯う云ふ場合に助けて下さるであらうが萬公さんでは心許ない。そして其お連れに申すのは何んなお方かな」

トマス「ハイ、男が三人、女が三人、さうも三夫婦らしうムいます。

島田漬して丸鬚結ふて

主と二人で宮詣り

「云ふ様な陽氣な様子でムいますよ」

左守

「その三人の男と云ふのは治國別さんか、龍彦さんの中であらう。モシ、そうであつたならば萬公さんはさうも入釜しくて困るから……治國別さんか龍彦さんに、一寸お目にかゝり度いと申して呉れ。そして外のお方は應接間にお茶でも出して大切に待たして置くのだ」

マス「ハイ、承知致しました。直様治國別様を呼んで参りませう」

トマス「さア、皆さん、お待ち遠うムいました。何卒應接間の方へお通り下さい。暫らくして左守がお目にかゝります。時に治國別様か、龍彦の宣傳使は此處に交つて居られますかな。根ッから萬公さんでは入釜しくて……一寸取込んでゐるから都合が悪……左守神が云つて居られました。何卒萬公さんは此處に御婦人の方と一緒に

に待つてゐて下さい。さアお二人の中何方でも宜しい、お一人さん、左守の居間へ行つて下さいませ」

シーナ 「拙者は玉置村の者でシーナと申すもの、實は治國別様の媒酌によつて里庄の娘スミエル姫と結婚式を挙げ、今日は玉の宮様へ禮詣りを致したのでムいます」

トマス 「ヘー、それは、マア／＼お目出度うムいます。一寸新婚旅行とお洒落遊ばした所ですな。アハ……も一人のお方、貴方は宣傳使ぢやムいませんか」

アーシス 「ハイ、拙者は矢張り玉置の村の者でアーシスと申します。一度左守神様にお目にかゝり度いと存じ、今度女房を持つたお禮に玉の宮様へ參拜を致し、一寸御面倒を致しました」

トマス 「ハ、ア、それはお目出度う。新夫新婦が二組もお揃ひになつたのですな。ヤ、

萬公さん、お前さんは到頭治國別様に暇を出され、ごつかの家で奉公でもしてゐるご見えますな」

萬公 「エ、入釜しく云ふな。之でも三五教の宣傳使萬公別だ。治國別様から此度新に萬公別の宣傳使と名を頂いたのだ。神徳無限の神司だ。取り込んでゐる事があるとは一体何事か知らぬが、此宣傳使に御相談あれば直様解決をつけて上げると、左守の神にさう仰有るが宜からう」

トマス 「ヘー相變らず大變な馬力ですな。左守神が何と仰有るか知りませんが、一寸奥へ傳へて來ます。暫時待つて下さいませ」

ご早くも此場を立つて左守の居間へ引返した。

トマス 「左守の神様、一寸調べて參りましたが、玉置村の若夫婦が新婚旅行を兼ね、玉

の宮様へ参拜を致し歸り道、萬公さんに連れられて、お訪ねをしたのだと云つて居ます。そして萬公さんは治國別様から新に宣傳使號を頂き萬公別となり、無限の神力を與へられたと云つて居られますが、此方へお通し申しませうか」

左守 「今日の場合、誰彼の容赦はない。萬公別なんて法螺を吹いて居るのだらう。併し乍ら萬公のチヨカさんも三五教の宣傳使の伴に歩いて居つたのだから、何處かに見込があるだらう。兎も角「膝ごも談合」と云ふ事がある。早く此方へお越し下さい」と云つて御案内して來い。さうして他のお客さんは珈琲でも出して鄭重に用の濟む迄待つて頂くのだ。失策のない様にして置くのだぞ」

トマス 「ハイ、そんな事に抜目がムいませうか。直様呼んで参ります。エーエ」と云ひ乍ら襖をビシヤリと締め、

トマス 「エーエ、忙しい事だ。彼ツ方へ行つたり、此ツ方へ行つたり、キリ／＼舞ひだ之だから、すまじきものは宮仕へに云ふのだ。ちやと云ふて外に何もこれと云ふ藝能はなし、先づ芝關番で辛抱するより仕方がないな」

と一人呟き乍ら應接室に慌たしく入り來り、

トマス 「イヤ、皆さん、お待たせ申しました。何卒珈琲なつミドサリ召つて、……五人の方は此處に待つて居て下さい。……萬公別なんて、宜い加減法螺を吹いてゐるのだらう。あの萬公は鈴の様に入笠しくて、おまけにデレ助で仕方の無い奴だけだ。治國別様の丁稚役をしてゐたのだから少しは靈術も利いて居るだらう。膝ごも談合だ。空腹い時には不味ものなし、萬公さんでも宜いから呼んで來て下さい……と仰有いましたさア萬公別さん、このトマスに跟着いて左守の居間迄お越しを願ひます」

萬公 「何だ、川瀬の様な顔しやがつて失敬ぢやないか。今日の萬公さんは玉置の村の里庄テームス家の若旦那だぞ。これ見い、此様なナイスを女房に持つて新婚旅行を兼ね、玉の宮へ参拜をしたのだ。チツと羨るい事はないか。エー、ダイヤ姫と何方が美しいと見わるか、ヒ、、、」

トマス 「エへ、、、、犬も歩けば棒に當るこか云つて、到頭治國別さんに暇を出され玉置の村の里庄の宅の門掃男となり、お嬢さんのお伴をして詣つて來たのだな。お前のスタイルでそんなナイスが女房に持てるものかい。遠い所で分らんと云つて、此トマスが一目チャンと見たら決して、はづれツこは無いいワイ。ウッフ、、、」

萬公 「エー、馬鹿にすない。左守神の奴、ダイヤ姫と俺との縁談をチャク／＼入れやがつたものだから此爺、仕方無い奴だ……と實の所怨んでゐたのだ。そして所、此通

り古今無双のナイスが……へ、、、此萬公さんに首ツたけラバーしたものだから、嫌でもない縁談を……俺もチツとはスキートハートして居たものだから兩方からピツタリと意思投合の結果お粗末乍ら……へん……合衾の式を擧げ新婚旅行と洒落てゐるのだよ。萬公別の腕前には如何だ。瀬のトマス、感服したぞらう」

スガール 「もし、萬公別さん、そんな事云つて下さいますな。妾耻しうムいますわ」
萬公 「何が耻しい。天下晴れての夫婦ぢやないか。エへ、、、これから左守神にアフンとさしてやるのだ。あ、愉快々々」

トマス 「此様子では、も一度左守神様に伺つて來なくちや直様お會せ申す譯には行きませんワイ。ま一遍伺つて來るまで一寸此處に待つてゐて下さいや。そして御主人のお嬢さんを大切に守つてゐて下さいや。うかく／＼するこ「此下男は氣が利かん」と

云つて又放り出されますよ」

と云ひ乍ら、又もや左守神の居間に踵を返し急ぎ行く。

萬公「ハ、、、スガールの美貌に肝を潰し魂を有頂天にして居やがるツイ。さア

此れからが三段目だ。オイ、スガール、今日は俺の男を左守の前で賣つて見せるの

だから、お前も辛からうがチツと意茶ついて見せて呉れんと困る。夫が妻に對する

一生の願だからな」

スガール「ホ、、、

キツと引締め三筋の糸で

主のお好きに紫檀竿。

焚いて喰はふと焼いて喰はうと萬公さんのお勝手ですわ」

萬公「へ、、、それでこそ三國一の花嫁だ。萬公別、萬歳」

(大正一二、三、五、舊一、一八、於龍宮館、北村隆光録)

瑞 月

身はたこへ根底に永く沈む共

夢な忘れじ神の大道は

一日も早く天人界に入り

瑞の御靈の力示顯たし

第二章 嬉

涙 (一四二九)

トマスは再び應接の間に現はれ来り、

トマス 「ヤア、萬公別さんを初め御一同様お揃の上さうか左守の室迄お越を願ひます。左守神様も大變な御心配が起つて居る所ですからさうか貴方方の御経歴話でも聞かして頂けば幾分がお氣が紛れるでせう。さア案内致しませうさうかお越し下さいませ」

萬公 「よし、左守の爺、萬公別を安く買やがつたな。皆一緒に来いなんて、よし、行つてやらう。サア案内せい、皆さん拙者に續いてお出なさいませ。三夫婦揃ふてピクトリヤ城の奥の間迄、玉置の村の里庄の息子が通る云ふ事は異數でムいますよ。是云ふのも矢張萬公別さんの餘光ですからな」

云ひ乍ら、トマスの後に跟いて長い廊下を潜り、左守神の居間に進み入つた。萬公は左守に向ひ、

萬公 「これは、左守の神のキニヒト殿、暫くお目に懸りません。我々は三夫婦揃ふて新婚旅行と出掛け、玉の宮への参拜の歸り途、一度御挨拶に上らないでは濟まないと思ひ、門番がゴテつくのをやつと潜つて此處迄参りました。随分貴方も年が寄りましたね。白髪がどつきり生れたぢやありませんか」

左守 「ハ、、、皆さん好くお出なさいませ。時に萬公さん拙者の白髪は二十年前から生じて居るのぢや、お前さん今氣がついたか。そして何處に奉公して居るか知らないが、綺麗な娘さんのお伴して居るが、身分相應云ふ事を考へて今迄のやうな野心を出さないやうにしない」

萬公はスガールの肩に手をかけ、

萬公「へ、へ、へ、もし左守様、ダイヤ姫様とはどうでムいますな。私の女房は、マアザット此通りでムいます」

左守「これく萬公さん、又してもお前さんは心得の悪い。主人のお嬢様を捉まへて女房扱ひをするに云ふ事がありますか。些々心得なさい」

萬公「へん、濟みまへんなア、おいスガール、左守の神様に疑の晴れるやうにお前から言つて呉れ。本當に誰も彼も俺を安く買つて馬鹿にして居るからな」

スガール「左守の神様、初めてお目に懸ります。私は玉置の村のテームスが妹娘スガールに申すものでムいます。バラモン軍に捉へられ猪倉山の岩窟で苦しんで居ました所を、治國別様一行がお出なさつてお助け下さつたのです。中にもこの萬公さ

んは實は萬公別様と申しまして治國別様のお師匠さんですが、ワザミに部下に化けて瓢箪の事許り云つてお出なさるのでムいます。私は治國別様の御媒酌によつて萬

公別の宣傳使と夫婦になり、玉の宮へお禮に参りましたその歸りがけ、夫と共に伺ひしました。何卒お見捨てなく今後はお心易く願ひます。そして此方はシーナさんと申し、スミエルと云ふ此姉の夫でムいます。も一組はアーシスさん、お民さんと申しましてこれも新夫婦でムいます」

左守「イヤ、どうも見違ひを致して居りました。萬公別の宣傳使さん、よくマアお尋ね下さいました。併し折入つてお願ひ申度い事がムいますが、聞いては下さいますまいか」

萬公「刹帝利様の御病氣とダイヤ様の行衛が分らないので御心配なさつて居るのでせう

がな」

左守は驚いて

左守 「ハイ、お察しの通りでムいます。さうしてマアそんな事がお分りになりましたか」

萬公 「何と云つても三五教切つての大宣傳使萬公別でムいます。千里先方の事でも斯うして居つてチャンと分つて居るのですからなア。併し乍ら此事は城下で一才聞いて來たのですよ。アハ、、、本當の事云へば薄紙を顔に當て、物を見る位より分りませんわい」

左守 「冗談はさておいて、萬公別さん利帝利様の御病氣はさうお考へですか」

萬公 「ヤア實の所は玉の宮様に参拜致し祈願の最中隆靖彦、隆光彦と云ふ二人のエンゼ

ルが拙者の前に下らせ給ひ、「利帝利様はベルツ、シエールの怨靈が惱めて居るか
ら早く汝はホーフスに入り、お助け申せ。さうしてダイヤ姫様は兩人の爲に苦しめ
られお命も危い所、四人の修験者に助けられ、やがてお歸りになるから御心配なさ
らぬやう、お知らせ申せ……」この事でムいます。夫故失禮をも顧みず六人連れで
お邪魔を致したのでムいます」

左守 「成程タルマンの伺ひにも左様の事を申て居りました。夫に間違ひはムいますまい
あ、有難うムいました。何卒直様、御苦勞様ながら利帝利様の御病氣平癒のため御
鎮魂をお願ひ申す譯には参りますまいか」

萬公 「拙者が別に利帝利様のお居間に参らすとも萬公別此城に入るや否や神徳に恐れ二
人の怨靈は雲を霞と逃げ失せました。やがてニコノ／＼として此處にお出になるでせ

う。又ダイヤ姫様も修験者に送られて此處へお歸りなさりませうから、先づ悠り落付きなさいませ」

左守 「ハイ有難うムいます。それで一寸安心を致しました。時にアーシスさんごやら貴方はごこともなしに忤のハルナに似て居るやうだが、貴方の生ひ立を聞かして貰う事は出来ませうまいかな」

アーシス 「ハイ」

と云つたきり、早くも涙をハラ／＼を流して居る。

萬公 「エ、アーシスさん氣の弱い、何を泣いて居るのだ。何故堂々とお名乗りなさるか」

アーシス 「ハイ、それでも何だか云ひかねます」

萬公 「モシ左守さん、貴方のお子さんご云ふのはハルナさん只お一人ですか」

左守 「ハイ、まア／＼一人でムいます」

萬公 「まア／＼一人とは、チツミ曖味ぢやありませんか。奥様の目を盗んで下女の部屋へ〇〇して腹を膨らせた事はありませんか」

左守 「ハイ、何分若い時にはいろ／＼の不仕舞の事もムいました。餘り耻かしくお話が出来ません」

萬公 「もし貴方の落胤が今無事で生きて居られたら貴方は喜んで面會しますか。イヤ親子の名乗りをしますか。先決問題として聞いて置きたいものです」

左守 「女房には死別れ、此通り年は寄り、一人の忤のハルナに女房をもたせ、今では一寸一安心したもの、ハルナの兄に當る、モンテスご云ふ忤があつた筈でムいます。

世間の手前、或田舎へ金をつけて子にやつた所、不幸な悴で兩親は無くなり、何處へ行つたか分らん云ふ噂を聞いて居りますが、今になつて思へば實に残念な事をしました。斯う年が寄つて何時天國參りをするか分からぬ身の上、せめて生前に一度其悴に遇ひ度いと神様を念じて居ります。どうか貴方の御神力で悴の所在を見て頂く譯には参りますまいかなア」

と鼻汁を吸りながらグタリと萎れる。

萬公 「もし左守さん、貴方の御賢息モンテス様は立派な奥さんを持つて、立派に暮して居られますよ。その又奥さんが一通りの人ではありません「提灯に釣鐘」と云ふやうな、身分から云へば懸隔のある御夫婦でムいます」

左守 「何、悴が立派に暮して居りますか、それは有難い事でムいます。さうして何處に

居りますかな」

萬公 「ハイ只今の所在はビクの國、ビクトリヤ城内、左守神の室内に、お民の方と云ふ奥様と、萬公別に從ひお出になつて居ります。それこのお方ですよ」

とアーシスを指さす。左守はアーシスの顔を熟視し乍ら、

左守 「アお前は悴であつたか。どこもなしにハルナに似て居ると思ふて最前から不審を抱いて居たのだ。まア無事で居てくれたか。さうしてお前の嫁と云ふのはどのお方か」

アーシス 「ア、お父さんでムいましたか。何卒一度お目に懸り度いと、寝ても醒めても忘れる暇はムいませなんだ。されど賤しき首陀に落ちて居る身の上、到底尊い左守神様に御面會は叶ふまいと諦めて居りました」

と男泣に泣く。左守も兩眼に袖を當て、夕立の如き涙を拭ひながら嬉しさ餘つて一言も發し得ず、アーシスの身体に抱きつき啼嘯泣きして居る。

お民は兩人の背を兩手で撫でながら、

お民「お父さん、日那樣、何卒潔 ようして下さいませ。私迄が悲しくなりますからな」

左守「アーお前が悴の嫁であつたか、好う來て呉れた。まあ、綺麗な女だな。悴も嘸喜んで居るだらう。私も嬉しい……」

と又もや兩眼に涙を湛へて泣きじやくる。

萬公「エー見つてもない、チツと確りなさいませ。萬公迄が悲しくなつて來ました。もしく左守さん、此お民さんは誰人の娘だと考へて居なさるか。勿体なくも利帝利様

の落胤玉手姫様でムいますぞ。チヌの村の卓助の家へお下しになつた王女様で、今はお民と名乗つて居られます」

左守はこれを聞くより驚いて五足六足退き、兩手をつかへ疊に頭を下け、

左守「貴女様が王女様でムいましたか。存ぜぬ事にて御無禮を致しました。あ、勿体ない。賤しき我々が悴の女房とおなり下され、冥加に盡きはせぬかと心配でムいます何卒お許し下さいませ」

お民「お父さん、何を仰有います。そんな事を云ふて下さると私は苦しうムいます。何卒、「お民く」と呼び付けにして下さいませ」

萬公「サア、親子の名乗が濟んだ上は涙は禁物だ、些つと歌でも歌ひませう」
斯く云ふ所へ、カルナ姫は襖をそつと押し開き叮嚀に辭儀をしながら、

カルナ「お客様、よくお出下さいました。何卒御悠りと御休息を願ひます。時にお父上様、刹帝利様が俄に御氣分がよくなり、御元氣におなりなさいました。「左守が心配して居るだらうから、早く知らせて来い」この君の仰せ、何卒お喜び下さいませ」

左守「何、刹帝利様の御病氣が御快癒なされたごな。あ、有難い、これと云ふのも全く三五教の神様の御守護、あ、惟神 靈幸倍坐世、惟神 靈幸倍坐世」
と嬉し涙に又掻き曇る、カルナは早々に此場を立ち去り刹帝利の居間に急ぎ行く。

(大正一二、三、五、舊一、一八、於龍宮館、加藤川千録)

第二章 比

丘 (一四三〇)

左守の神のキュピットは六人の容をトマスに命じ叮嚀に應接させ置きながら、欣々として刹帝利の居間に伺候した。刹帝利はソファの上に横たはりヒルナ姫に介抱され乍ら、稍快方に向つたので顔色も俄によくなり、ニユ〜として居る。左守の神は兩手を仕へ、

左守「刹帝利様、お氣分がよくなりましたさうでムいますなア、左守も尊顔を拜し何となく氣分が浮々と致して來ました。何卒此後の御養生が肝腎でムいますから御注意下さいませ」

刹帝利「窓外は庭園の樹木が風に揺られて自然のダンスをやつてゐる。涼しい夏の風は

自然の音楽を奏で、予が心を慰めてくれる。實に病の身は苦しいもので、此天然の恩恵も左まで愉快に思はなかつたが、此通り気分がよくなると又格別にすべての物が面白くなつて來たやうだ」

左守 「左様でムいます。庭木に風が當つて自然の音楽を奏する様は、丸でクラブイコー
ドの音色の様でムいます。オルグレットな気分が漂ひますなア」

刹帝利 「左守、何か珍らしき話を聞かして呉れないか」

左守 「ハイ、別に珍らしい御話もムいませんが、姫様の事は御心配なさいますな。屹度神様の御陰で日ならず御歸り遊ばさうでムいます。貴方の御病氣がオルグレットに赴いたのも全く三五教の宣傳使萬公別さんの御骨折でムいます。萬公別様がわざ／＼我君の御悩みを御案じ遊ばしてエンゼルさんの命令だ云つて來て下さいまし

た。其時刻から御病氣が輕快に向つたのでムいます」

刹帝利 「何、三五教の萬公別様が來て下さつたと云ふのか。而して姫は日ならず無事に歸るご申されたか」

左守 「ハイ、あの宣傳使の御言葉には少しも間違ひはムいませんから、御安心下さいませ。今私の居間で御休息を願つて居ります。而して刹帝利様に珍らしい御話を申し上げたいのは、外ではムいません。耻かし乍ら今より二十五年以前下女を孕ませ、男の子を産み落しモンテスと名をつけて首陀の家へやつて置きました。其忤が立派な奥方を伴れて只今萬公別の宣傳使と共に城内に參り、親子の對面を致し、力一杯贈し泣きに泣いて來た所でムいます。イヤもう埒もない事を致しまして御耻かしうムります」

利帝「それは結構だつた。定めてモンテスも喜んだであらうなア。御前も嘸嬉しかつただらう。ア、それに就いても思ひ出すのは、チヌの里へ里子にやつた姫は何うなつたであらう。未だ無事で此世に生きて居るであらうか。年が寄るにつけて氣が弱つたと見れば、民間に與へて縁を切つた子供の事までが思ひ出され、せめて息ある内に一度何とかして會ひたいものだが、仄に聞けば養家の兩親は早くも世を去り、娘の行方は知れぬといふ事だ。定めて難儀をして居るであらう」

左守「我君様、姫様がモシヤ此世に御無事で居られましたならば、貴方は快く御會ひなさいますか」

利帝「久離切つても親子は親子だ。さうかして一度娘に會ひたいものだ。會ふて娘に詫

をせねばなるまい。ア、可愛想な事をしたものだ」

ヒルナ「左守殿、萬公別の宣傳使様に御尋ねいたしたら姫様の所在が分りはせよまいかな。一つ願つて貰ひたいものだな。我君様も大變に姫様に懐かれてゐられますからさうか一つ願つて見て下さいなア」

左守「實の所は恐れ多い事でありますが、私の忤モンテスの妻となり、立派な服装をして夫婦仲よく玉の宮へ御参拜になり、宣傳使と共に今私の居間に休んでゐられます」

利帝「ナニ、姫が城内へ来て居るといふのか。而して御前の忤と夫婦になつて居るのか夫れは結構々々、これも何かの因縁だ。一時も早く姫に會ひたいものだ」

左守「御差支さへなくば直様御供をして参りませう」

ヒルナ「我君様、妾が御迎へして來ますから、寸時御待ち下さいませ。サー左守殿参り

ませう」

ヒルナ姫は欣々として刹帝利の許しを受け、六人の客室に進み行く。萬公別は一生懸命に刹帝利の病氣平癒とダイヤ姫の無事歸城せん事を五人の男女と共に祈つてゐる眞最中であつた。ヒルナ姫は襖の外に立つて左守と共に祈願の済む迄待つて居た。ヒルナは折を見計らひ、サツと襖を引き開け、叮嚀に兩手をついて、

ヒルナ「三五教の宣傳使様、よくまあ我君の御病氣を御助け下さいました。有難うまいります。就てはお民の方に刹帝利様が一度面會がしたいと仰せられますから、何卒皆さん御一緒に御居間まで来て下さいませぬか」

萬公「ア、貴方はヒルナ姫様、先づく御無事で御目出度う存じます。イヤもう太い御世話に預つて居ります。サ、皆さん、姫様の御後から参りませう」

と一同を促しぞろぞろと六人は左守、ヒルナの後に従つて、王の居間に進み行つた。

萬公「刹帝利様、今春は師の君と共に永らく御世話に預りました。私は玉置村の里庄の養子となり、女房を引き連れて玉の宮へ参拜をいたしました處、隆靖彦、隆光彦のエンゼルが忽ち御降臨遊ばし、刹帝利の御病氣の原因や姫様の御行衛を御知らせ下さいましたので、一寸御訪問致しました」

刹帝「エライ御厄介に預りまして有難うムります」

萬公「此方は王様の御落胤チヌの村のお民さんでムいます。新婚旅行を兼ね玉の宮へ御参拜になつたのでムいます」

刹帝「ア、其方が姫であつたか。ようまあ無事でゐてくれた。折角城内に生れ乍ら首陀の家へ落したのは、私が悪かつた。何卒許してくれ。お前は玉手姫と云ふたであら

うがな」

お民「ハイ、玉手姫でムいます。お父さん、御無事で御目出度うムいます。會ひ度うム
いました」

と兩眼よりハラ／＼と落涙してゐる。刹帝利も身を起し、玉手姫の手を握つて嬉し涙
に暮れ、暫し無言の儘、互に抱つて啜り泣いてゐた。斯かる處へ慌たゞしく玉の宮
の拜禮を了へて歸つて來たタルマン、エクス、ハルナの三人は出で來り、兩手をつき
乍ら

タルマン「刹帝利様に申し上げます。ダイヤ姫様が修驗者に送られて、只今無事に御歸り
になりました。御目出度うムいます」

刹帝利「アー嬉しい事が重なれば重なるものだ。サ早くダイヤと修驗者を此處へ御案内申

しや」

タルマンは只一人「ハイ」と答へて此場を立去り、暫くあつてダイヤ姫、修驗者四
人を伴ひ、欣々として入り來り、

タルマン「我君様、ダイヤ姫様が御歸りでムいます」

刹帝利「ヤ、其方はダイヤ姫、ようまあ無事に歸つてくれた。お前は一体何處に行つて居
たのだ」

ダイヤ「ハイ、父上の御病氣御全快を祈願せんと、住み馴し照國山の清瀧に水垢離をこ
り居りまする處へ、前の右守神ベルツ及びシエールの兩人現はれ來り無体な事を
申し、終には双方より妾を殺さうといたしましたので、櫂の根を楯にとつて防ぎ戦
ふ折しも、山彦を驚かして聞か來る法螺の聲追々近づくに見ると共に四人の修驗者

が現はれて、妾の危難を御救ひ下され、此處迄送つて来て下さいました。何卒御禮を申して下さいませ」

利帝「何れの修驗者が存じませぬが、よくまあ娘を救けて下さいました。サア、何卒御緩りと御休息下さいませ」

治道「拙者は御見忘れになつたか知りませんが、元はバラモン教のゼネラル鬼春別でいます。此三人は久米彦、スパール、エミシでムいますが、治國別様の御教を承り、菩提心を起し修驗者となり、私は治道居士、久米彦は道貫居士、スパールは素道居士、エミシは求道居士と名を改め、照國山の清めの瀧に修行に参らんと法螺貝を吹き鳴らし、上りて見れば姫様の御遭難、直様悪者を追散らし、此處迄送つて参りました」

と一伍二仕の物語に、利帝利を始め一同はアツと許りに驚き、互に顔を見合せて少時言葉も出なかつた。利帝利は殆んど會見絶望と諦め居たりし二人の姫に廻り合ひ、嬉し涙を浮かべ乍ら、兩手を合せて、三五教の大神に感謝の祈願を奏上し始めた。左守の神も我子に會ひし嬉しさに、同じく合掌し感謝の辭を奉つてゐる。ハルナは思ひも寄らぬ兄のモンテスに會つて兄弟の名乗りを上げ悦び勇む。玉手姫は父に逢ひ、又妹のダイヤ姫に思はず面會して歡喜の涙に咽んでゐる。

偕治道、道貫、素道、求道の四人の修驗者は利帝利の依頼に依つて玉の宮の守護役となり、頭を丸めて三五の教を四方に宣傳し、代る／＼各地に巡錫して衆生濟度に一生を捧た。頭髮を剃り落し教を宣傳に廻つたのは、此四人が嚆矢である。而してピクの國の玉の宮から始まつたのだから、後世頭を丸め衣を着て宣傳する聖者を比丘と名

づくる事こととなつたのである。あ、惟神かながら靈幸たまは倍坐世はま。

(大正一二、三、五、舊一、一八、於龍宮館、外山豊二録)

瑞 月

只一人蒙古に吾身在りしなば

東亞の經綸遂げ得しならん

今しうらばしうらばしうらと指折り待つ間に

吾を見すて、月日は走る

瑞靈押込みおきて雨を持つ

世を知る人の愚なるかな

眞善美愛(午の卷)終り

大正十四年三月廿六日印刷
大正十四年四月五日發行

不許
複製

眞善美愛(午の卷)奥附

定價壹圓五拾錢

京都府何鹿郡綾部町字上池田二七番地

編輯發行 櫻井重雄

京都府何鹿郡綾部町字本宮東四ツ辻十三番地

發行所兼 天聲社

〔振替大阪六〇五三四〕

△豫

告△

眞善美愛(未の巻) 四月十五日 發六の豫定

目次

序文……………

總說……………

第一篇 自愛之棚しげらみ

第一章 神慮……………

第二章 戀淵……………

第三章 仇花……………

第四章 盜歌……………

第五章 鷹魅……………

第二篇 宿緣妄執

第六章 高歴……………

第七章 高鳴……………

第八章 愛あひ米こめ……………

第九章 我執……………

第三篇 月照荒野

第一〇章 十字……………

第十一章 惚おぼろ泥どろ……………

第十二章 照門風……………

第十三章 不動瀧……………